

# 総合研究大学院大学

## 平成 27 年度学生企画事業

研究活動の「これから」を考える

- 全国の URA 重点大学における研究支援システムの現状調査 -

## 事業報告書

# 目次

|             |    |
|-------------|----|
| 「学生企画事業」とは？ | p2 |
|-------------|----|

|      |    |
|------|----|
| はじめに | p3 |
|------|----|

## 第一章 準備

|             |    |
|-------------|----|
| 協力を依頼した大学一覧 | p4 |
|-------------|----|

|         |    |
|---------|----|
| 準備・活動日程 | p5 |
|---------|----|

|                  |    |
|------------------|----|
| 事前調査 ( 文献調査まとめ ) | p6 |
|------------------|----|

## 第二章 経過

### ヒアリング調査

|        |     |
|--------|-----|
| - 金沢大学 | p11 |
|--------|-----|

|             |     |
|-------------|-----|
| - 信州大学、大阪大学 | p12 |
|-------------|-----|

### 第 1 回 RA 協議会

|              |     |
|--------------|-----|
| - 総研大ニュースレター | p13 |
|--------------|-----|

|          |     |
|----------|-----|
| - 参加レポート | p14 |
|----------|-----|

### 総研大 URA カフェ

|         |     |
|---------|-----|
| - 目的と概要 | p16 |
|---------|-----|

|             |     |
|-------------|-----|
| - クロストークの様子 | p17 |
|-------------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| - 総研大ニュースレター | p22 |
|--------------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| - 参加者アンケート結果 | p23 |
|--------------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| - 参加者からのコメント | p24 |
|--------------|-----|

## 第三章 総括

### 反省会

|       |     |
|-------|-----|
| - 議事録 | p25 |
|-------|-----|

|        |           |     |
|--------|-----------|-----|
| おわりに   | ・ ・ ・ ・ ・ | p26 |
| 主要参考文献 | ・ ・ ・ ・ ・ | p27 |
| 編集後記   | ・ ・ ・ ・ ・ | p28 |

## 資料編

### 企画の経緯

- 申請書 ・ ・ ・ ・ ・ p29

### 企画の概要

- 企画書 ・ ・ ・ ・ ・ p31
- 企画参加者募集フライヤー ・ ・ ・ ・ ・ p32

### 第 1 回 RA 協議会

- 参加者募集案内（総研大内対象） ・ ・ ・ ・ ・ p34
- 第 1 回 RA 協議会 発表要旨 ・ ・ ・ ・ ・ p36
- 第 1 回 RA 協議会 発表ポスター ・ ・ ・ ・ ・ p37

### 総研大 URA カフェ

- 参加者募集案内 ・ ・ ・ ・ ・ p38
- 広告ポスター ・ ・ ・ ・ ・ p40
- プログラム ・ ・ ・ ・ ・ p41
- 発表スライド ・ ・ ・ ・ ・ p43

### 運営

- 総研大 公募型研究事業公開報告会 発表スライド ・ ・ ・ ・ p62
- ホームページ ・ ・ ・ ・ ・ p64
- 写真 ・ ・ ・ ・ ・ p65

## 「学生企画事業」とは？

総研大の学生企画事業とは、総研大生の自由な発想の元、学生が主体的に行うプロジェクトを支援する事業です。総研大の教育研究理念に基づき、広い視野を持ち、実践的な問題解決能力を持つ研究者を育成することが目的となっております。

過去には、研究発表や議論を通じて全学的な学術交流を行う「総研大ワークショップ」、他の大学院大学の学生との交流を行う「GakuSay Net 大学院生交流会」、総研大の基盤機関を訪れ、そこに属する学生や教員にインタビューを行い、異分野の交流について議論を行う「SOKENDAI Student Conference 2014」などのプロジェクトが行われました。

このように、過去のプロジェクトの多くは、学生間の交流を促すものが多く実施されました。総研大の各専攻のキャンパスの多くは物理的に離れており、他キャンパスの学生との交流を持つ機会がなかなかありません。学生企画事業は、学生間ネットワークの形成の機会を多く提供してきました。そこでの出会いがまた新たな学生企画のプロジェクトの創出につながっているようです。

プロジェクトの実施にあたり、企画、ロードマップ策定、スケジュール管理、経費の執行計画、作業の分掌、渉外、報告等、やらなければならない様々な作業があります。このような実践的な問題を解決する能力は、研究をマネジメントする上でも不可欠な能力ですが、普段の研究生活ではなかなかトレーニングすることができません。学生企画事業は、顧問教員の指導の下、それらの作業を試行し、能力を涵養できる機会にもなっております。

また、本事業の支援の条件として、実施体制が研究科を跨ぐ複数の専攻に所属する学生より構成されることが必須になっております。実施学生たちは、研究科を跨ぐことで、必然的に異分野の研究者とコミュニケーションをとらねばなりません。プロジェクトを進める上で、分野の違いによる価値観の違いに悩まされることもしばしばあると思います。しかし、そこでの経験は、将来の異分野連繫研究の創出と実施の上できっと役に立つはずです。これまでの実施学生が研究者として独立した際に、既存の研究分野には無い、斬新な異分野融合研究を提案し、科学の発展に貢献していくことを願っております。

## はじめに

University Research Administrator (以下、URA) とは、「教育職員と事務職員の間に位置づけられる、第三の職」です。URA は、研究活動の支援だけではなく、大学全体の経営にも深く関わっています。

私自身は、脳科学領域で研究生生活を送っていることから、異なる分野の研究者同士の協働をサポートする仕事はとても重要であると普段から感じていました。あるとき、研究プロジェクトをマネジメントする場面で、URA が研究者の協働を支援している、という話を聞きました。それをきっかけに、URA が研究活動においてどのような役割を担っているのかに興味を抱き、この企画を提案しました。そして、自身とは異なる視点を持つ他専攻の学生有志の協力を得て、私たち総研大 URA 研究会の活動はスタートしました。

学生が URA に興味を持ち理解を深めようとする活動は、全国的に見ても先例のない試みでした。それにもかかわらず、各大学の URA の方々は、ヒアリングへのご協力をはじめ、事業全体を通して大変多くのご支援をしてくださいました。そして、さまざまな専門分野や学年におよぶ学生が、総研大 URA 研究会の運営に尽力してくれました。さらに、2015 年 11 月には、大学院生が URA について理解を深めることを目的とした公開イベント「総研大 URA カフェ」を無事開催することができました。現職の URA による講演、そして他大学や異なる専攻の学生との活発な意見交換は、総研大 URA カフェの参加者にとって大変刺激になったようでした。

1 年間の活動を経た今、URA について理解を深めることは、「研究・教育活動の全体像」を俯瞰することにつながっていると感じています。大学院生のうちにそのような広い視野を獲得するチャンスをいただいたことを、今後の自身の研究活動やキャリアを拓いていくうえでの糧にしていきたいと考えています。この報告書では、私たちが URA について見聞きしてきた内容と、得られた調査成果を基に互いに意見を交わした様子を、みなさまのお手元に届けたいと思います。

総合研究大学院大学 生命科学研究科 生理科学専攻

5 年一貫制博士課程 4 年

菊地原沙織

## 協力を依頼した大学一覧

文部科学省事業「リサーチ・アドミニストレーター (URA) を育成・確保するシステムの整備」の採択機関より、下記の3校のURA室にヒアリング調査の協力を依頼した。

金沢大学（平成23年度採択）

- 日本では最も早期にURAのシステムを導入した大学である。
- 総研大の修了生がURAとして勤務している（平成27年度現在）。

信州大学（平成24年度採択）

- 地域貢献・産学連携の区分で採択された。
- 第1回RA協議会の運営を担当した。
- 総研大の修了生が平成26年度までURAとして勤務していた。

大阪大学（平成24年度採択）

- 世界的研究拠点の区分で採択された。
- 総研大の学融合主催のイベントに、大阪大学所属のURAが以前参加されていた。

## 準備・活動日程

2015 年 5 月 16 日 日本大学 三島キャンパス

第 1 回ミーティング

議題：文献調査の報告 / URA への質問内容の検討

4 月 -5 月  
文献調査

2015 年 5 月 26 日 金沢大学

URA へのヒアリング

2015 年 6 月 15 日 信州大学 松本キャンパス

URA へのヒアリング

5 月 -7 月  
ヒアリング

2015 年 7 月 5 日 国立民族学博物館 会議室

第 2 回ミーティング

議題：RA 協議会発表内容の検討 / 総研大 URA カフェ の内容の検討

2015 年 7 月 6 日 大阪大学 吹田キャンパス

URA へのヒアリング

2015 年 8 月 29 日 自然科学研究機構生理学研究所 会議室

第 3 回ミーティング

議題：総研大 URA カフェのリハーサル

9 月  
RA 協議会

2015 年 9 月 1 日 -2 日 信州大学長野 (工学) キャンパス

RA 協議会第一回年次大会 (ポスター発表)

2015 年 11 月 14 日 イオンコンパス東京八重洲会議室

総研大 URA カフェ (公開イベント)

11 月  
総研大  
URA カフェ

2016 年 2 月 6 日 熱海

第 4 回ミーティング

議題：反省会 / 報告書作成

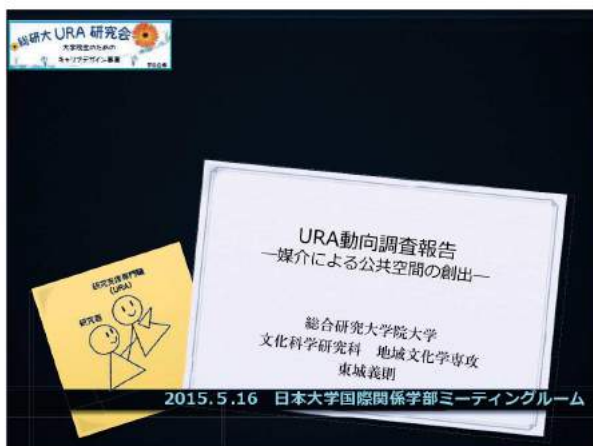
2 月 -3 月  
事業報告

2016 年 3 月 12 日 金沢

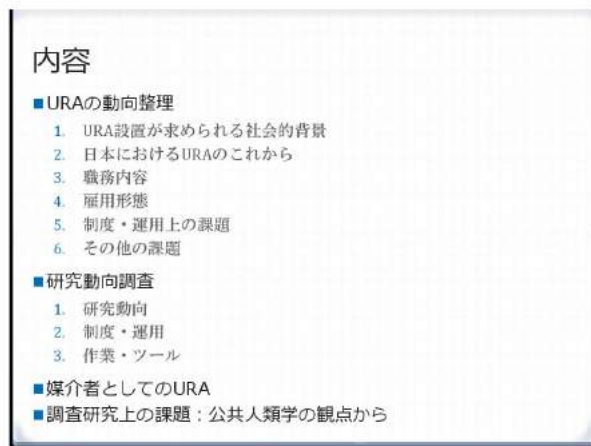
金沢大学の URA 職員 3 名 (総研大 OB を含む) へ事業報告



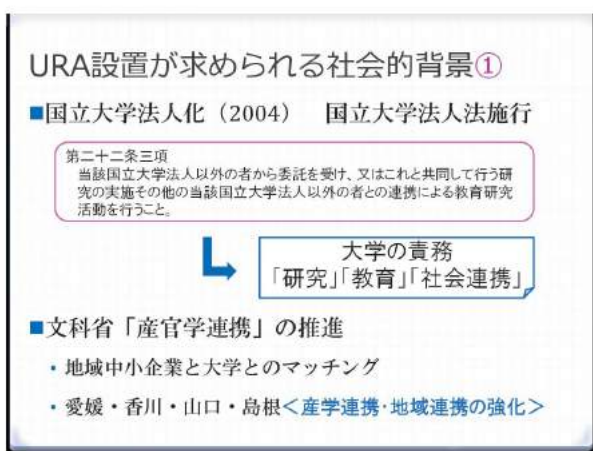
# 第一章 準備



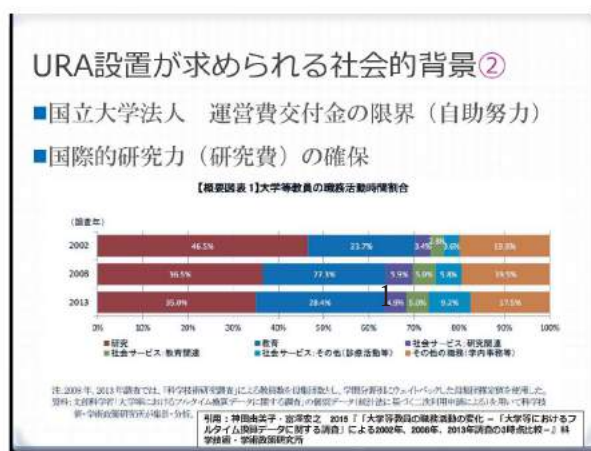
1



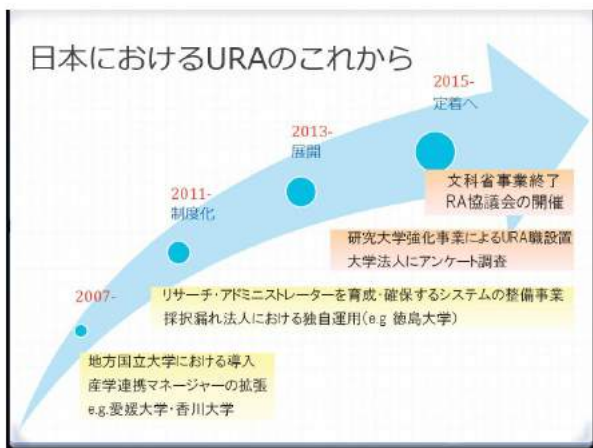
2



3



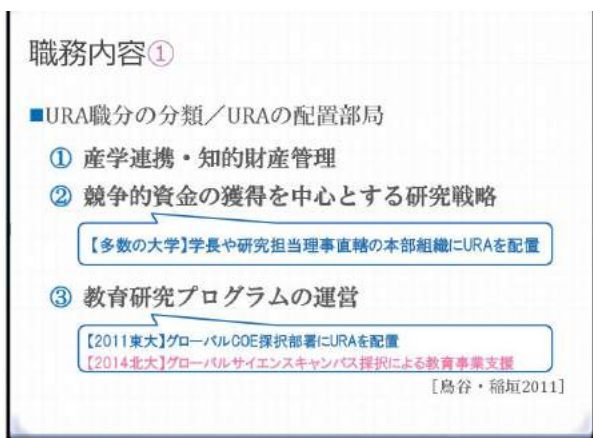
4



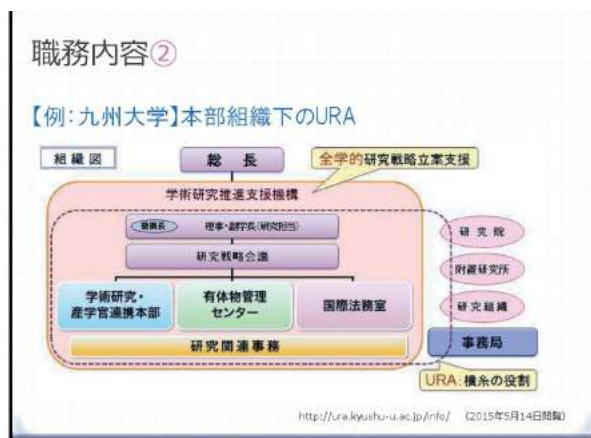
5

| 年    | URA関連のできごと  | 備考   |
|------|---|--|
| 2005 | 報告書『研究者のノンアカデミック・キャリア』において、海外ノンアカデミックの事例として言及。                          | 科学技術論研究者による私案  |
| 2008 | 文科省「大学等産学連携自立化促進プログラム」公募、採択。  | 香川大学、同事業の採択に伴いURAを独自確立。<br>福井大学、同事業の採択に伴い、URA室の前身組織を確立。              |
| 2009 | 学術研究奨励会の研究担当理事・副学長懇談会（RU11※）の検討課題として「リサーチ・アドミニストレーター」（URA）の育成、確保が掲げられる。 |  |
| 2011 | 文科省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」事業はじまる。                              |  |
| 2012 | 東京大学、スキル標準化報告書作成  |  |
| 2013 | 文科省「研究大学強化促進事業」の公募、採択。  | 自然科学研究機構・高エネルギー加速器研究機構・情報システム研究機構、採択される。<br>※ 総研大自然科学・工学系基盤にURA関連職設置 |
| 2014 | URAシンポジウム「大学の研究経営システムの改革に向けて～URAへの期待とURAシステムの課題～」開催                     | 文科省事業（委託調査）  |

1

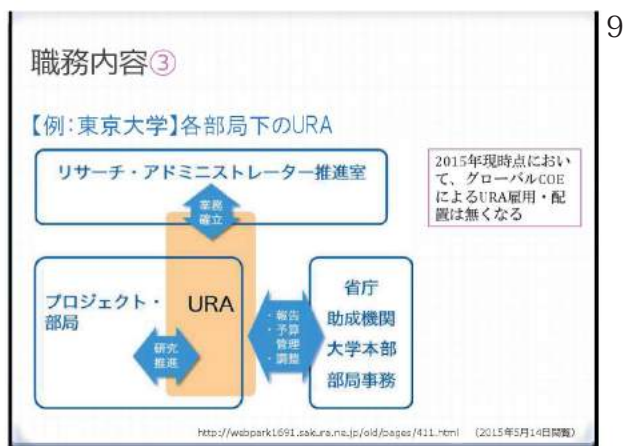


7



13

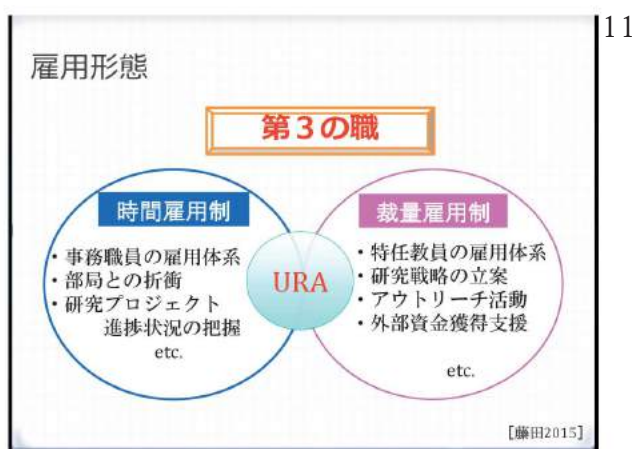




9



10



11

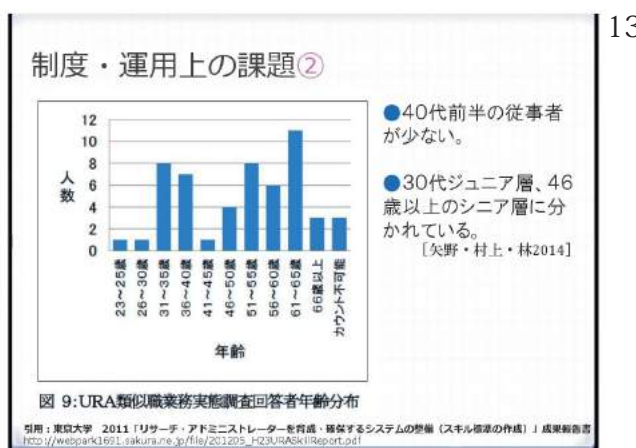
### 制度・運用上の課題①

| URA職の保持学位 |    | URA職の専門        |    |
|-----------|----|----------------|----|
| 学位        | %  | 専門分野           | %  |
| 博士        | 59 | 工学・エネルギー       | 45 |
| 修士        | 21 | 理学・地球環境        | 17 |
| 学士        | 12 | 医学・医療政策        | 8  |
|           |    | 薬学             | 6  |
|           |    | 経済学            | 6  |
|           |    | 経営学            | 2  |
|           |    | 文学・考古学・ジャーナリズム | 6  |

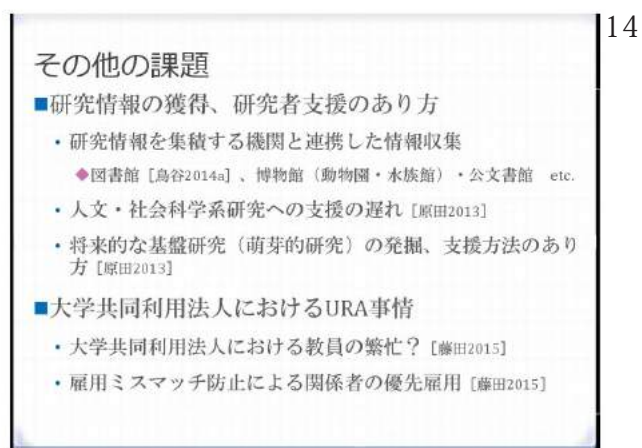
- 博士号取得者が半分以上
- 工学分野の採用者が半数近くを占める

【矢野・村上・林2014】

12



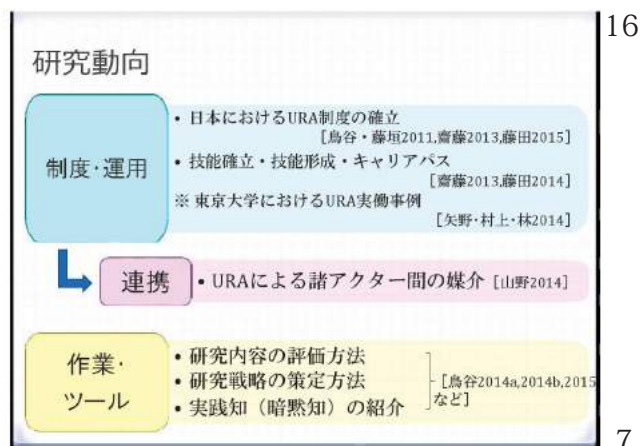
13



14



15



16

## 制度・運用

## ■日本におけるURA制度の確立

- ・URA類似職着任後のキャリアパスの行方 [島谷・藤垣2011]
- ・多様な技能を要求、企業との人材獲得競争 [藤田2015]
- ・不適任な人材の着任による弊害 [齋藤2013]

## ■技能確立・技能形成・キャリアパス

- ・URA養成方法の確立 [島谷・藤垣2011, 齋藤2013, 藤田2015]
- ・文科省事業の終了後におけるURA類似職の維持 [藤田2015]
- ・スキル標準化によるURA職の確立、実働 [矢野・村上・林2014]

17

## 作業・ツール

[藤田2015; 島谷2014a, 2014b, 2015]

## ■研究内容の評価方法

- ・各種論文データベースからマイニング
- ・論文数・被引用回数
- ・共同研究者の属性（共同研究内容の調査）

## ■研究戦略の策定方法

- ・情報データベースの構築
- ・研究者の個人データの蓄積
- ・手法の確立、用いる解析ソフトの導入
- ・多様な部署との折衝

18

## 媒介者としてのURA①



19

## 媒介者としてのURA②

## ■これまでの大学：「教育」「研究」、財源の安定

- ・官 or 民どちらかの主導によって成り立つ公共性

## ■異なる構成体を「つなぐ」 [山野2014:141]

- ・大学（高等教育機関）における公共空間の構築
  - ◆ 科学者・研究者、Journal community [藤垣2003] の外部へ
- ・多様なメタ属性をもつ構成体（アクター）を媒介する

## ■URAの育成：公共空間に創出する実践

- ・公共空間を前提として活動する研究者（異なる他者との協働）にとっては、研究活動の延長線上に位置づけることも可能（“public”を争点とする研究）

20

## 調査・研究上の課題：公共人類学の観点から

## ■関係性の構築

- ・研究者や企業など、異なる属性の人びとに対するアプローチ方法（≠均質なコミュニケーション能力）
- ・これまで身につけてきた技能（スキル）を応用して、自分自身を作業現場に適応させる
  - ◆ 前提から場に適した職能の定着（実践共同体としての作用）

## ■現代日本社会における大学

- ・知識の生産現場⇔知識の応用現場（⇔知識の喪失現場）
- ・研究（者）ってなんだ？人類としての知識工学（集団）
  - ◆ “ホモ・アカデミクス”の存立基盤を大学という公共空間に据え直す

21

## 主要参考文献

- 藤垣裕子 2003『専門知と公共性』東京大学出版会。
- 藤田晃 2015「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」と「研究大学強化促進事業」の現状と課題-URAのキャリアパスを中心に」『研実紀要』09:61-76。
- 原田隆 2013「URA（University Research Administrator）の果たすべき役割」『生特工学会誌』91（10）:600。
- 伊藤真知子 2015「学際研究の萌芽をいかに促すか：生命科学の事例から」『研究技術計画』29:144-159。
- 中山保夫・細野光章・清水佳津子・小林信一 2007『地域における産学官連携—地域イノベーションシステムと国立大学—』科学技術政策研究所第2研究グループ・筑波大学大学研究センター。
- 齋藤誠一 2001『公共性』岩波書店。
- 斎藤芳子 2013「大学における研究アドミニストレーション職の専門性と能力開発」『名古屋高等教育研究』13:37-51。
- 齋藤芳子・小林伸一 2005「10. ノンキャリア・パス—知識社会のための人材養成へ—」『研究者のノンアカデミック・キャリアパス』産業技術総合研究所技術情報部門。
- 島谷真佐子 2014a「リサーチ・アドミニストレーターと図書館の研究情報連携」『情報管理』57（3）:193-195。
- 2014b「研究力強化のための情報統合と分析リサーチ・アドミニストレーターの立場から」『情報管理』57（7）:490-493。
- 2015「研究評価と研究戦略における研究力分析」『情報管理』57（7）:490-493。
- 島谷真佐子・堀垣美幸 2011「リサーチ・アドミニストレーターの現状と課題」『大学行政学会誌』15:33-40。
- 山野真裕 2014「学際研究進展と大学組織改革の相互作用—東京大学における学際研究教育とURA配置の事例—」『研究技術計画』29（2/3）:132-143。
- 矢野正晴・村上興枝・林理幸 2014「我が国のリサーチ・アドミニストレーターの現状と制度設計—東京大学の事例を中心として—」『大学論叢』45:81-96。

22



2015 05 16 @三島

## 科学技術人材システムにおける現状と今後の方向性

### 科学技術イノベーション人材のキャリアパスとURA

遺伝学専攻 松本悠貴

**引用文献**  
平成23年 科学技術白書  
http://www.next.go.jp/b\_menu/hokusho/html/hpaa201401/detail/1348881.htm  
第1章 人材強化の基本的方向性  
http://www.next.go.jp/component/b\_menu/other/\_icofiles/afidfile/2014/06/18/1348881\_004.pdf  
第2章 科学技術イノベーション人材の確保や活躍促進に向けた取組と今後の方向性  
http://www.next.go.jp/component/b\_menu/other/\_icofiles/afidfile/2014/06/18/1348881\_005.pdf  
http://www.next.go.jp/component/b\_menu/other/\_icofiles/afidfile/2014/06/18/1348881\_005.pdf

1

## 社会の成熟化による科学技術イノベーション人材の必要性 (p39-43)

### グローバル化

### 少子化

### ニーズの多様化

### 知識の専門化

深い専門知識を持つ高度人材の確保と活用すべき  
(研究者以外のキャリアも含む)

2

## 科学技術イノベーション人材の確保や活躍促進に向けた方向性と取り組み (p70-77)

- 研究職における流動性の高い人材システム(?)
- 多様な人材が活躍できる環境づくり
- 新しい知識や価値の共創の場

博士課程修了者が、大学・公的研究機関での研究者のみならず、民間企業の研究者、リサーチ・アドミニストレーター、技能者、研究マネジメント人材、研究評価人材、知財関係人材、科学コミュニケーター、小・中・高等学校等の教員、公務員など多様な職業で活躍することを促進する必要がある。

3

## 研究者においては、なんでもこなすスーパーマンが必要 (p123)

若手研究者にとって、論文執筆能力やプレゼンテーション能力といった基本的な能力に加え、統括能力や教育能力といった多様なスキルの習得が重要となる。

4

## 多様な研究スキルの習得のためのトレーニングは十分には実施されていない (p123)

5

## 日本の研究支援者数は各国のそれよりも低い が、国内の支援者数は減少傾向 (p69)

6

## 日本の研究支援者数は各国のそれよりも低い が、国内の支援者数は減少傾向 (p69)

7

## 学部長レベルの研究者の意識調査では、大部分がURAが必要であると感じている (p150)

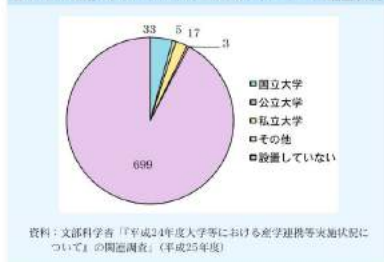
※ただし、現在はURAがより浸透しているため、この結果が変わっていると思われる

8

9

近年で多少増加しているものの、URAはまだまだ浸透していない(p151)

第1-2-73図／リサーチ・アドミニストレーターの配置状況

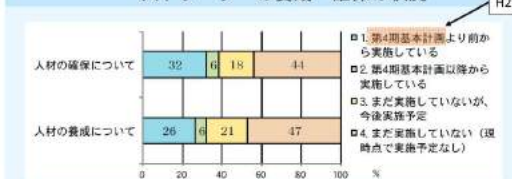


大学等757機関のデータ

9

URAの養成および確保は進められている(p151)

第1-2-74図／独立行政法人におけるリサーチ・アドミニストレーターの養成・確保の状況



34の独立行政法人のデータ

10

## 文科省が言いたいことのまとめ

- 社会の成熟化に伴い、高度な専門的知識をもちながら、教育能力や統括能力をもったスーパーマン的人材が必要
- URAはまだ浸透していないが、今後ますます重要になる

11

## ヒアリング調査 (金沢大学)

5月26日、総研大URA研究会のスタッフ（総研大生2名、教員1名）が金沢大学を訪問して、URA職員の方にインタビューをおこないました。URAとは、研究活動を支援・マネジメントする専門職です。金沢大は、文部科学省の事業「リサーチ・アドミニストレーター (URA) を育成・確保するシステムの整備（平成23年度～）」の実施以前に、全国に先駆けてURAシステムを導入した大学です。総研大URA研究会では、URAを大学院生の将来のキャリアのひとつとして捉えており、「URAがどのようにして大学のニーズに応えているのかを知りたい」と考えています。そのため、URAのシステムが根付いている金沢大学に、訪問調査をさせていただくことを依頼しました。今回の調査では、総研大高エネルギー加速器科学研究科OBの鈴木友さんが、我々の受け入れに対応してくださりました。金沢大でのインタビューでは、主に申請支援の業務に携わっているURAの方々4名にお話を伺いました。まず、大学からの「国際化」「研究力強化」のニーズに応えていくために、研究者とURAが協働して国際共同研究の戦略を練っている、というお話を聞かせていただきました。また、URAは大学の独自性を高めるためのユニークな取り組み（大学内の研究グラント「超然プロジェクト・先魅プロジェクト」や、学部生のための「学長と行く五箇山合宿」などの学内企画）に積極的に関わっている様子も知ることができました。

このインタビューを通して得られた新たな発見は、URAの仕事は、「常に新しく、同じ仕事はひとつとしてない」ということ、そして現職のURAの方々は、仕事を通して「日々成長」を実感されているということでした。特に印象的だったことは、「申請支援」の仕事は、大学の研究力を高める資金獲得へとつながる「チャレンジングでやりがいのある仕事」であること、そして、長年のキャリアを積んだURAは、経営戦略を執行部と共に考える「コンサルタント」のような職務も担っていることです。金沢大学でのお話を聞いて、URAは、博士号取得者が専門的な能力と視野の広さを生かして活躍できるキャリアパスとして、今後いっそうの注目を集めていくであろう、と感じました。

文責：生理科学専攻 菊地原沙織

## ヒアリング調査 (信州大学、大阪大学)

6月15日、研究会のメンバーである総研大生3名と教員1名は、文部科学省から先進的 URA の活動を行っていると評価されている信州大に訪問しました。今回のインタビューは、日本の URA の草分けである杉原伸宏教授 (信州大 URA 室長) です。

「信大の URA は、一般的な URA の仕事を越えている。」インタビューが始まった直後に、杉原教授はこう切り出しました。信州大の URA では、個人の研究者の支援というより、大学全体のマネジメントを行うことが主な仕事だそうです。また、杉原教授は、現在の大学には、個々の研究者の支援をしつつ、大学経営ができる人材、すなわち UA (University Administrator) のような人が必要であると言います。現在の大学は執行部と個々の研究者の間をつなぐような人材がいないために、執行部のビジョンと大学全体の潜在能力の間にギャップがあります。このため、URA がそのギャップを埋めていくことで、大学の運営をより円滑に行えるのではないかと指摘しています。コミュニケーション能力や企画・実行能力に加え、情報収集能力が URA にとって必要な能力であり、大学マネジメント要員としての URA を提案しています。杉原教授は、私たちが考えてきた URA 観をひっくり返す、まさに一般的な URA の仕事を越えている仕事をされていました。

文責：遺伝学専攻 松本悠貴

学生企画事業「総研大 URA 研究会」の活動の一環で、7月6日に大阪大学の URA の方へインタビューに伺いました。インタビューを引き受けて下さったのは、大阪大学大型教育プロジェクト支援室 URA チームの宮田知幸先生、岩崎琢哉先生でした。

今回私は初めての参加でしたが、インタビューに同行するまで、URA というのは「論文の引用数などを調査して大学の強みを分析したり、研究費獲得の補助をしたりする方」という印象を持っていました。しかし、大阪大学の URA の方々は、研究費獲得の補助はもちろんのこと、アウトリーチといった研究と社会とのつながりに関する活動もされていました。それらは私が抱く URA 像とは異なっていました。また、両先生が URA に着任されるまでの経緯、そして着任されてからの活動について伺うことで、大学院生のキャリアパスとしての URA について考えを深めることができました。

文責：核融合科学専攻 坂東隆宏



## 第1回 RA 協議会 総研大ニューズレター

平成 27 年度の学生企画事業採択課題の「研究活動の『これから』を考える—全国の URA 重点大学における研究支援システムの現状調査—」のメンバーで組織された総研大 URA 研究会では、その活動の一環で、9 月 1 日から 2 日にかけて長野県長野市の信州大学長野（工学）キャンパスで開催された RA 協議会第 1 回年次大会に参加してきました。URA,RA（ともにリサーチアドミニストレーターの略）とは、研究活動の支援を主な業務とする職業です。RA 協議会とは、全国の URA,RA, またその類似職の方々が一堂に会し、情報交換を行う場です。今回は第一回の大会であったにもかかわらず 400 名以上の参加者がありました。

私たち総研大 URA 研究会は、URA に関する文献調査と、現役の URA へのヒアリング調査を行うことで、大学を基盤とした科学と学術の現状について理解を深めてきました。また、博士号取得予定者の今後のキャリアとして URA はどのように位置づけられるのか、そして URA に求められる知識やスキルとはどのようなものなのか、学生間で議論を交わしてきました。それらをまとめ、「大学院生の目を通して見た URA—総研大における学生企画—」と題したポスター発表を RA 協議会にて行いました。学生の参加はほとんどなかったこともあってか、私たちの発表は良い意味で目立っていたようで、ポスターには絶え間なく来客がありました。総研大 URA 研究会が結成された背景や、研究会のメンバーそれぞれの持つ問題関心、博士号取得者が URA に採用された際に生じるスキル習得上の課題、人社系出身の学生に適した業務と理工系出身の学生に適した業務についてなど、多様な観点から意見交換を行うことができました。

総研大 URA 研究会では、11 月 14 日（土）に東京八重洲会議室にて、成果報告会を兼ねた「総研大 URA カフェ」という公開イベントを開催する予定です。当日は現役の URA の方にも参加していただく予定で、総研大 OB の URA も招待しています。URA ってなんだろう…、大学はいまどういう問題に直面しているんだろう…人社系の学部学科が削減されるって聞くけど…、博士号取得後これからどうすればいいんだろう…などなど、こうした疑問について、主催者・参加者・URA で意見交換してみませんか？皆さまのご参加を心からお待ちしています。

### 【RA 協議会に参加した学生からの声】

RA 協議会は自分のキャリアパスとしての URA について深く考えるきっかけとなりました。RA 協議会では、国の関係省庁による取り組みの紹介から、各大学の研究支援の様子を紹介する発表まで、URA が関係する領域についてのさまざまなセッションが行われていました。参加してみて知ったのは、URA はまだ定義すらできていない新しい職だということです。大学ごとに URA に期待することに差がありました。大学執行部のセッションで感じたのは、URA はこれからの大学で重要な役割を果たす職だということです。ですが、まだ定義すらできていない不安定な職なので、大学からのさまざまな需要に応えなければならないようです。博士課程終了後、すぐにその需要に応えられる学生は少ないと思います。

私は RA 協議会に参加して、自身の研究をさらにやっと思いやうと思いました。URA になるには、研究者として研究を行ったという経験が必要だと思います。研究者として過ごした先にあるキャリアのひとつに URA はあるのではないのでしょうか。



## 第 1 回 RA 協議会 参加レポート

生命科学研究科 遺伝学専攻

田中 弥

### 第二章 経過

今回 RA 協議会に参加してみて最も印象に残ったのは、URA が行う活動の幅広さでした。もともと科研費等の申請だけが URA の仕事だと思っていたわけではないのですが、異分野に属する研究者同士を繋げて新しい研究の価値を見出したり、大学の研究力を様々な角度から分析し大学の強みを再発見したりといった、具体的な取り組みを協議会では知ることができました。研究者をサポートだけでなく、その大学での研究全体を発展させていく URA の取り組みは非常に魅力的に感じました。

一方で、当然ではありますが URA にはまだできないことも多くあるようでした。各大学での成果を発表する際に、発表者の多くが「これはうまくいった一例でうまくいかないことの方が多い」と話していました。また URA という職の地位もまだ確立しているとは言えず、何をしているか分からない、そんな人を雇うのは無駄だ、という声は根強いと URA の方々は感じているようでした。これらの事情があるからこそ、今回の協議会のような成功例やそこに至るまでの取り組みを共有する場はとても重要なのだと思います。この機会を活かそうとする、URA 自身に限らずその活動を後押しする大学や国の職員も含めた、参加者たちの積極的な姿勢は印象的でした。

私自身の属する生命科学の分野に立ち返ってみると、研究者同士の架け橋になり研究の視野を広げる URA の力がこの分野には必要だと私は考えます。生命科学では近年、扱う情報量が爆発的に増えたことに伴い情報科学や計算機科学の力を借りることが必須となってきました。また、生命現象を実験ではなく数学・物理学・化学のような理論で解き明かしていこうという動きも強まりました。生命科学では様々な角度からのアプローチが求められる一方で、これらの広大な学問の範囲を 1 人の研究者がカバーすることは不可能です。こういった状況に対し、研究者同士をつなげ、研究全体を俯瞰し方向性を見極めるという役割を URA は担うことができると、今回の協議会を通して私は感じました。そして、理想ではありますが、そういった仕事はとても魅力的なものだと私は思います。

## 第 1 回 RA 協議会 参加レポート

物理科学研究科核融合科学専攻

坂東隆宏

9 月 1 日 2 日の日程で RA 協議会に参加しました。私は、5 つのセッションに参加しました。①研究広報、②人文社会系の研究力の計測、③プレアワードを体験するワークショップ、④ポストアワード業務の発展、⑤ポスターセッションです。

①研究広報のセッションでは、研究機関がプレスリリースを出した後、その資料がメディアにどのように扱われるか紹介されました。他にも、発表内容を記事にしてもらうためにプレスリリースを出すタイミングや、メディアごとの取材の仕方の違いなどについて紹介されました。どのようにメディアがプレスリリースを取り扱うか知る機会は少なく、貴重な情報でした。②人文社会系の研究力の計測に関わるセッションでは、人文社会分野の研究を比較する際にベンチマークとなるような指標が存在していることを指摘した上で、どのような指標が用いられるべきか議論されました。たとえば、論文誌の評価に対しては、論文著者の多様性を表すダイバーシティファクターが提案されました。このダイバーシティファクターを用いることで、人文系だけではなく、数理系の論文誌の評価も可能であるとのことでした。③プレアワード業務を体験するワークショップでは、「とある准教授が競争的資金へと応募する際にどのような支援を行うことができるのか」をテーマにチームで議論しました。RA 業務を経験されている方と議論でき、非常に良い経験でした。④ポストアワード業務の発展に関するセッションでは、ポストアワード業務が発展しているとされる大学の業務の仕方が紹介されました。ワークショップのセッションと合わせて、RA の主要な業務であるプレアワード、ポストアワード業務に関する理解が深まりました。⑤ポスターセッションでは、産学官連携の研究開発の取り組み、博士課程学生の情報に関するデータベース開発、学際研究を促進する仕組みの開発、といった内容のポスターを訪れ、発表者と議論を行いました。どのテーマも私の興味と一致し、それぞれのテーマに関する理解が深まりました。

私が関係する核融合発電実現化へ向けた研究では、発電炉を作るためにプラズマ物理学や炉工学などの様々な知識を統合する必要があります。RA 協議会へ参加した結果、核融合発電の分野では、関連分野の研究の状況を把握し共同研究を推進できる RA のような存在が必要不可欠だと感じました。

RA 協議会への参加を通して、RA そのものに対する自分の理解が深まりました。このような機会を提供してくださった RA 協議会の参加者のみなさまに感謝いたします。

## 目的

- ・ URA について理解を深めることで、参加者自身の研究活動の進めかたや、今後の長期的なキャリア形成の参考にする。

- 各大学における研究支援の現状および URA に必要とされる専門的なスキルについての調査成果を広く学内外からの参加者で共有する。
- 現職の URA による発表を通して、URA の職務の実際を知る。
- 参加者同士の意見交換と URA への質問により、URA についての理解を深める。

## 概要

| プログラム     | 内容  |
|-----------|---|
| 文献調査の報告   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現代の大学の役割とは</li> <li>・ 大学での研究・教育のためには、どのような人材が必要なのか</li> <li>・ URA の整備が日本で始まった背景</li> <li>・ 日本の URA の職務内容や雇用形態について</li> </ul> |
| ヒアリングの報告  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学ごとに URA による研究支援のあり方が異なる</li> <li>・ 大学院生の目を通して見た URA</li> </ul>   |
| URA による発表 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 総研大における URA 類似職の仕事の紹介</li> <li>・ 総研大の基盤機関における URA の仕事の紹介（総研大修了生）</li> <li>・ 金沢大学 URA の仕事の紹介（総研大修了生）</li> </ul>               |
| クロストーク    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 参加者の自己紹介</li> <li>・ グループディスカッションにより意見交換</li> <li>・ 各グループから 3 つずつ、現職の URA への質問</li> <li>・ 会場全体での意見交換</li> </ul>               |
| 総括        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ URA からの講評</li> <li>・ 閉会あいさつ（総研大学融合推進センター長）</li> </ul>  |

## 総研大 URA カフェ クロストークの様子

### A グループ

- (1)「一番楽しいと思える瞬間は？」
- (2)「あなたの人生において URA とは？」
- (3)「給与面の待遇はどうですか」



参加者：一つ目は、URA をされて一番楽しいと思える瞬間の話をお聞きしたいと思いますが、どうでしょうか。

鈴木 (友)：お金の申請が通った瞬間というのが一番やりがいを感じると思いますか、楽しいと思います。やりがいを感じるのは申請が採択されたときです。逆に通らなかったときは、すごく悲しかったり、隣の人がいい結果を残していたりしたら、すごく悔しかったり、そういう逆の面もあります。

楽しい瞬間については、やはり耳学問でいろいろな事を知って、それがニュースで聞いたことや、文科省のページで見たこととつながっていきると、誰のために役立つわけではないですけども、自分の知識として増えていくことに喜びを感じます。そのぐらいです。

東城 (司会)：杉原先生、何かありますか、何か楽しいこと。

杉原 (信州大 URA)：もちろん、お金を取るの楽しいですよ (会場笑)。

9 月に開催した RA 協議会がありましたが、信大の建物については 64 億円が通りました。たった 3 人の URA が書いて取りました。取るときも楽しいですけども、考えているときの方がもっと楽しいです。企画しているときは、もう、わくわくしています。

参加者：二つ目は、URA はかなり特殊な職業だと思いますけれども、人生において、URA はどういう位置付けとして、職業して選ばれたのかなというのがすごく気になったので、そちらをお話しいただけますか。

東城：これは深いですね。

鈴木 (友)：私は広報になりたくて、広報の仕事ができるのが URA でもあります。

杉原：URA は実は何をやってもいい。大学の中で、ある程度自由度があるポストなので、自分のやりたいことをどんどん提案していけば、もっと自分の活動範囲が広がって、とても楽しいと思います。

参加者：三つ目に、URA のお金がどのくらいもらえているのかなと、みんな気になっているようですけども (会場笑)。

東城：ちょっと何か重いですね。差し支えなければ、URA 類似職の総研大の先生、いかがですか。

塚原 (総研大・学融合教員)：平均の人よりは、ちょっともらえています。退職金がないので、その分いいかなという感じですね。ポスドクのときにもらった給料よりも、180 万ぐらいアップしました。

平田 (総研大・学融合教員)：教員になれば、自動的に結構高くなるんですよね。ポスドクであるか教員であるかで結構違います。

鈴木 (友)：まず任期が単年度契約で、最高 3 年という状況で、いまはやっています。任期はきついです。

七田 (総研大・学融合教員)：例えば、国公立大学の助教クラスの金額は、「国立大学助教」でググってみてください。すぐに出ます。だいたいそれぐらいがスタートだと思ってください。いろいろな大学の平均値も出てきます。URA に関しても、大学によって職位が変わって来たりすると、また金額が変わってくるというイメージで考えていただくと、たぶん分かりやすいと思います。

塚原：ただ、経費が非常にかかります。イベント参加とかが、すごく多いから。

七田：あと、お酒ですね。

塚原：お酒は使わないといけません（会場笑）。

東城：細かい話は、この後の懇親会で（会場笑）。

杉原：おそらく、国立大学の場合は、教員の俸給表を使っているところと、事務職員の俸給表を使っているところがあるので、自分の年齢をそれにはめてみれば、だいたい出ます。第三の職種の俸給表を持っているのは、京都大学と福井大学など本当にわずかですが、教員と事務の中間ぐらいの給与です。あとは自分の年齢を入れれば分かります。

### B グループ

(1) 「URA あり／なしで出た効果は？」

(2) 「URA 職の今後 10 年後をどう考える？」

(3) 「研究の経験はどの程度必要？ 年齢層は？」



参加者：一つ目は、実際にいま、URA ありきの話になっていますが、実際に私の大学にはないですし、あったのと、ないので、どれだけ効果が出ているのかという実感が、URA の方にどれだけあるのか、ちょっとリアルにお聞きしたいなということです。何かコメントがあれば。例えば杉原先生のお話のように、あれだけの金額が取れたというのが、実際、実感だと思いますけれども。

杉原：URA がない大学と、われわれのような大学を比べると、確かに URA がある大学の方が、同じ規模の大学で比べると、大型事業が取れています。そういうのは客観的に分析すると見えますね。

菊地（総研大・学融合教員）：やはり利用する側から見ると、なかったら、えらいことになるんですよ。資金を出すときに、それこそ窓口になってくれる所がなければ情報が来ないというのもありますけれども、具体的にコメントをもらえたり、あるいはコメントを直接くれないまでも、マネジメントや調整してくれる部署があると、すごくありがたいのです。

実際に、URA があるから取れただろうなという実感は私にはあります。幾つか研究費を取っていて、統計的に見た場合にどうかというのは分かりませんが、実感としては、URA の方がいてくれるのは、非常にありがたい感じです。

鈴木（友）：例えば、今年、学振の DC を見たんですけれども、支援した結果のパーセンテージが大学全体とほとんど変わらなかった。そういうときに、ちょっと意味がなかったかもしれないと思うときがありますね。URA の意義というのを、そういうときに考えます。

東城：ありがとうございます。

参加者：二つ目は、これもちょっとシビアな質問ですけれども、文科省の採択が終了して、残す大学と、残さない大学もあったと思います。残した大学で皆さんは働かれていますと思いますが、10 年後にポストが残っているのかという不安がディスカッションの中ですごく出ていました。

実際に働いている方が、これからポスドク的な立場ではなく、パーマネントでと考えたときに、もちろんパーマネントとして残っているだろうと思っていらっしゃるのか、それとも残していかな



参加者(続き): いといけないと考えているのか、そもそも URA 自体が変わっていくとあっていってしまっているのか、その辺のコメントがあればと思いました。

七田: 先ほどから、URA 職はパーマネントがないという話がありますけれども、一つ先に言っておきたいのは、テニユアトラック制度が、今後、基本的な制度になっていくこともあって、URA 以外の大学の研究職もパーマネントはなくなるということは、まずは思っていた方がいいのではないかと思います。

鈴木(友): テニユアトラックというのは分かりますか。

七田: テニユアトラック、分からないですね。テニユアトラックというのは、必ず任期付きで採用されます。何年という期限を切って、その職場に求められるだけの能力、成果を出したら引き続き契約していく。

いまの大学の状況を見ていると終身雇用になるかどうかは分かりませんが、とにかく、ある一定の条件をクリアすることです。いけばいいというものではなく、本当に明確なノルマが課せられます。それをクリアできて初めて、その次というふうに続いていく制度に今後はなっています。

いまもだいぶ始まっていますけれども、教授職もテニユアトラックというかたちになると言われています。つまり、全部が任期付きという方向になる。それがいいか悪いかというのは、またあって、すごく批判もされますが、悪いことだけではないという現状があるということです。

東城: また懇親会で続きは、いろいろ伺ってみてはと思います。

## C グループ

(1) 「理系出身の U R A と文系出身の U R A では、どのような違いがあるか」

(2) 「U R A は研究者にどう思われていると思っているか」



参加者: 一つ目は、理系出身の URA と文系出身の URA では違いがあるかということです。もしあるとすれば、仕事としてのスキルなどが全然違うと思うので、どういう違いがあるのか、お聞きしたいと思います。

東城: すみません、杉原先生、何かコメントを頂けますか。

杉原: 本学も理系の博士と文系の博士と両方います。文系は文系の研究業績評価の仕方があって、単純に理系とは違いますね。文系の業績評価と、ほかの大学との比較も含めて、文系出身の方がそれなりの枠も持っているので、いま文系出身には、文系の研究力をどう分析させるかというところを、いろいろ考えています。そこが大きいところかな。

参加者: 文系出身の方が文系が分かるから。

杉原: 文系のバックボーンが分かっていますから。ただ、文系の中でも、例えば文学とか、芸術とかでは、まったく評価が違いますよね。それを総合大学として同じ土俵に乗せて、どう評価していくかという評価基準をつくったり、あるいは他大学と比べるときはどうしたらいいかというところは、いまほかの大学でもいろいろ取り組んでいますけれども、本学も文系出身者には、その辺も重点的に当たってもらったりしています。

参加者: 基本的には職務内容が違うというか。

杉原：文系出身のメリットを生かしてというところです。

参加者：なるほど、分かりました。ありがとうございます。

二つ目は、URA は研究者にどう思われているか、という書き方になっていますけれども、ここまでの話を聞いて、どうも URA という職は、大学側の人間といったらあれですけども、大学のビジョンを研究者に伝える感じがしてしまって、実際に研究者に、URA の仕事に対してどういう声が挙がっているかを聞いてみたいですけども。実際に、そういう声を研究者の人から聞くことができるのかというところから。

鈴木（友）：URA の知名度は、私が思っているほど大学内にはなく、たぶん半分も URA を知っている人はいないのではないのでしょうか。研究者の育成も URA の仕事で、テニュアトラックという文科省の事業は若手を育てる事業ですけども、それに採用された若手は URA に支援されているんですね。そうやって育った生え抜きというか研究者は、ずっと URA を頼ってきますね。

参加者：なるほど、ありがとうございます。

#### D クループ

- (1) 「日本と外国の URA 活動の違いは？」
- (2) 「他者の専門分野を添削するコツは？」
- (3) 「他者の専門を扱うことに対して、どのように思っているか」



参加者：一つ目は、日本と海外の URA で結構違うという話があったと思いますが、うちの班としては、例えばアメリカですと寄付の文化が広まっていたり、そういうお金の使い方や回り方というのがすごく違うと思っています。予算の割合みたいなものとか、そういったものの違いが URA の活動に与えている影響はあるのかという質問がありました。

鈴木（友）：日本の URA は、少なくとも競争的資金を取りに行く、それが一番の仕事だと思われるし、実際にやっていることはそうだと思います。アメリカはもっと多様で、大学の戦略を考えると、学長クラスの人が上から指示を出すような、司令塔のような仕事をしている方もいると思いますし、お金を取りに行くような人もいます。アメリカの方が多様な感じになっていて、日本の方が範囲が狭いのではないかと思います。

小松（総研大・学融合教員）：私は宇宙のことを研究しているので、アメリカの事情を例に挙げますと、大学に下りてくるグラントというのは大統領の意向がすごく大きく反映されます。そういう意味でいうと URA をスキップしてしまいましたが、次の大統領がどれぐらい自分の研究に目を向けてくれるか、来年、再来年のことを考えることが多いので、学会でもグラントを下ろす研究会には、たくさんの人が聞きに来ます。一人一人の研究者が、自分がもらう研究費について、次はどうなるかをすごく気にしているんですね。

日本では、あまり気にしている人はいないと思います。科研費をどれぐらいくれるかは気にしますが、政府の意向がどのように影響するかを考える人は、あまりいないと思います。少なくともアメリカの場合は、政治まで気にしている人がたくさんいます。日本も、そのような傾向になってく



小松（続き）：かもしれないですね。科研費もそうなっているのです。研究者の意識も日本とアメリカでは違うのではないかと思います。

参加者：ありがとうございます。二つ目と三つ目は関連しているのでまとめたいと思います。例えば、添削をしたり、アドバイスをしたりします。私はやはり自分の専門を持つと、こだわりがあるとか、ここは捨てられないとか、ある意味プライドのようなものがあると思っています。他者の専門を扱うことに対して、どのような思いがあるかというか、どのように扱っているか。何か一言だけ頂ければ。

鈴木（友）：生物系の申請書を見ることも多く、専門は素粒子実験物理学だったので全然違う。自分一人でコメントするには怖過ぎるので、誰か専門が近いスタッフに一度見てもらっています。相場観がある人に聞きますが、「そういうときは、これは言うべきじゃない」「これは分野に関係なく失礼な言い方をしている、言葉遣いが悪い」など、相場観しかり、言葉遣いしかり、いろいろ言われますね。そこはプライドなんか持っていられないという状況ですね。

参加者：ご自身の専門分野の場合はどうでしょう。

鈴木（友）：素粒子物理や物理の先生を見ることに関しては、逆にプライドを持ってやっています。

杉原：おそらく専門外の人の方が、的確に申請書の添削はできます。なぜなら専門家ではないので、第三者の目を見て、ポイントがどこかを分かりやすく抽出して添削できる。自分の専門に入ってしまうと、重箱の隅をつつく方に、自分も入っていく恐れがあるんです。むしろ違う分野の方が、論点はどこですか、要点はどこですかと、はっきり言えると思うので、むしろ広い視点で、いろいろな分野に踏み込んだ方がいいかなと思います。

平田：文章を誰が読むかという、別に専門家が読むわけではないんです。それも素人が読む。だから、素人が読んで分かる文章にしなければいけないので、むしろ専門家でない方が絶対にいいです。

まったく分からないというのはあれだけど、それなりに非専門家として一生懸命分かろうとするにしても、読んでも分からないようなものを書かれても困るわけですよ、そこはプライドというのではなく、専門が違うことがむしろ大事だということかな。逆に、自分の専門性が持っているこだわりにも気が付くと思いますけれど、そういうことは経験だと思います。

## URA からの講評

坂本：いっぱい人のことをだまして、いっぱいだまされて、いっぱい経験して、URA をやりたかったらやってください。ただ、答えは山にいてもないんだから、里に下りて人に関わってください。そうすれば、きっと何か面白いことができるのではないかなと思います。頑張ってください。

鈴木（友）：講演で言い忘れたことで一つ言いたいのは、私は広報になりたくて、URA として広報のスキルを広げていきたいと言いましたが、逆にそういうことがしっかりできることによって、URA としての私の寿命を延ばしていくのではないかな。できることと、できないことのギャップを埋めていくことが、結構重要ではないかと、皆さんにもお伝えしておきたいと思います。

杉原：URA の制度は、わが国に導入されて間もないところで、まだ本当に手探りの段階だと思います。今日の話が決して全てではなく、今後どんどん URA という仕組みも変わっていくと思いますので、もし興味があれば、いろいろな所で情報収集して、いまどういう状態になっているのか、自分のキャリアパスと合うのかを常に意識してもらえればと思います。ありがとうございました。

11月14日(土)都内にて、「総研大 URA カフェ」を開催しました。本イベントは、University Research Administrator (以下、URA) について大学院生や若手研究者に紹介し、参加者自身の今後の研究活動やキャリアを考えるイベントです。他大学も含め21人の学生が参加し、全体では34人と、予想をはるかに越える多数の参加者がありました。参加学生の専門分野も宗教学や天文学、高エネルギー科学、核融合科学、脳科学、遺伝学など、実に多様で、異分野交流の機会となりました。集まった参加者の動機は、URA がどのような仕事なのか知りたい、将来のキャリアの一つになり得るかどうか考えたい、広報に興味があるなど、様々でした。イベントでは、学生企画事業の担当学生による調査結果の発表、URA・URA 類似職の3名の方々による発表、そして参加者から URA の方々への質問、というプログラムを組み、URA についていろいろな角度から理解を深めた後に会場全体での意見交換を行いました。講演でお話いただいた、坂本貴和子先生(生理学研究所特任助教)と、鈴木友様(金沢大学 URA)は総研大修了生であり、参加した総研大生にとっては URA として活躍する先輩のお話を聞ける機会となり、刺激を受けたに違いありません。さらに、総研大の学融合推進センターの先生方、そして信州大学 URA 室長の杉原伸宏先生にもゲストとしてご来場いただき、多くの貴重なコメントをいただきました。

大学院生や若手研究者のうちから現職の URA に話を聞き、その仕事の実際を知る機会は、日本ではこれまでほとんど例がなく、本事業の特にユニークな部分です。URA の仕事は実際にはとても広い範囲に及んでいるのですが、申請支援や広報活動などの外から見えやすい URA の姿ばかりに私たちは注目してしまいがちです。その点、本イベントでは、URA は所属研究機関の経営戦略に深く関わり、機関の研究活動を推進させるための支援をしているマネジメント職である、ということを実際の URA のエピソードから伺い知ることができました。すなわち、各研究機関が目指すビジョンを実現するために、個々の URA は研究活動全体を俯瞰する視点を持ち、最短かつ最適な戦略を立てて行動しています。多くの大学院生は、日頃、個々の研究に向き合う中で近視眼的になりがちですが、参加者の皆さんは本イベントを通して URA を知ること、専門や組織を超えた大きな枠で、自身の研究活動を俯瞰できたのではないのでしょうか。「総研大 URA カフェ」の参加者が、5年後、10年後に未来の日本の研究活動をリードしていく研究者になることを願っています。

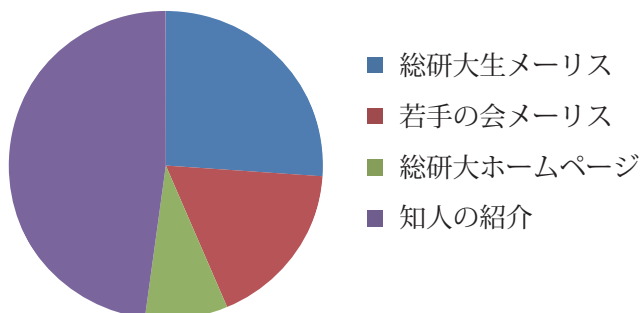
文責 生理科学専攻5年一貫制博士課程4年  
学生企画事業「総研大 URA 研究会」代表 菊地原沙織

## 満足度 (平均: 各 5 点満点)

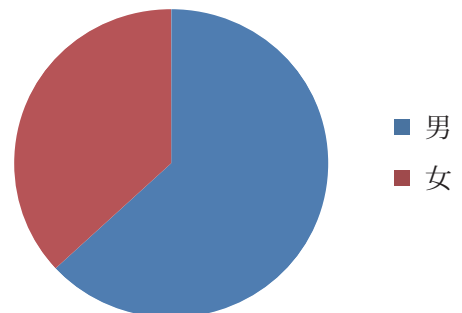
|                 |     |
|-----------------|-----|
| 発表内容            | 4.5 |
| フリーディスカッションの充実度 | 4.1 |
| プログラム構成         | 4.2 |
| プログラム進行         | 4.2 |
| 会場の立地           | 4.6 |
| イベントを通して        | 4.4 |

## 参加者について

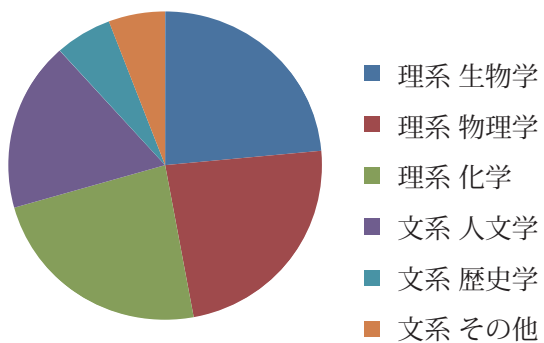
### カフェ参加のきっかけ



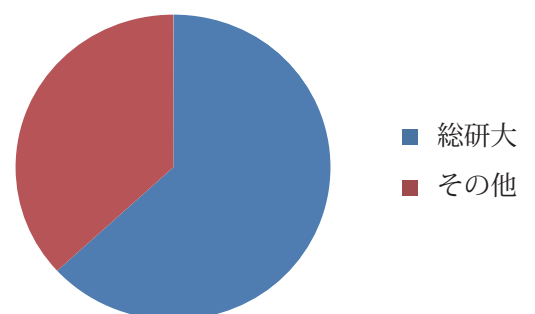
### 男女比



### 専門領域



### 所属



## 興味深い内容 (自由記述)

- ・坂本先生、フリーディスカッション
- ・坂本先生
- ・研究成果の資源化
- ・全て
- ・URA になるきっかけ
- ・ゲスト講演
- ・自己紹介
- ・坂本先生のお話
- ・クロストーク
- ・URA の仕事内容
- ・URA に必要なスキルについて
- ・URA の先生のお話
- ・発表と質疑応答

## その他コメント (自由記述)

- ・発表ごとに質問タイムがあればよかった。
- ・部屋が狭い、異なる背景の方意見が聞けて良かった。
- ・URA の支援をしている研究者など、URA でない人の話を聞けて良かった。
- ・ありがとうございました。
- ・URA の業務内容が細かすぎて追うのが大変だった。
- ・スケジュールは悪くなかった、ディスカッションをもう少し長くしても良いのでは。
- ・グループディスカッションは必要なかったのでは。
- ・会場の入り口がわからない。
- ・URA に関していろいろ知ることができました。ありがとうございました。
- ・URA を活用している先生のお話を聞けて良かった。
- ・答えてほしい質問はその場で答えてほしかった。
- ・総研大を知れてよかった。他大だから最初は居ずらかった。
- ・大変勉強になりました、有意義でした。
- ・講演とディスカッションの時間をわけた方がいい。

## 全体を通して

- ・企画をしてみるという経験は、研究会やプロジェクトを将来オーガナイズする際の練習になったと思う。
- ・企画の段階である程度、事業内容をよく練っておくべきだった。事業が動き出して方針が決まるまで、時間がかかってしまった。
- ・以前学生企画をしていた人（東城さん）がアドバイザーとしていてくれたので非常に助かった。
- ・何かのセミナーを企画し、学生に参加してもらうことを想定していた場合に、参加するメリットをきちんと説明できないといけない。そのためには、企画の目的を明確にしておくべきだった。
- ・研究者を目指して入ってくることが想定される総研大の学生に対して、URA というキャリアを考えるというアピールポイントで参加者を募るのは、あまりよくなかった。
- ・外部の人のとの連絡では、特に敬語での応対に神経を使う必要がある点が大変だった。

## 総研大 URA カフェについて

- ・他の専攻のみならず、学外と繋がるイベントができて良かった。
- ・当日、質問コーナーを作ってしまった。そのことは事前に講演者の方全員に話しておくべきだった。
- ・各講演ごとに質疑応答の時間をとるべきだった。
- ・企画者の話だけでなく、実際に URA の方が来て話をしてくださったことは、集客の面でもよかったのではないかな。
- ・カフェというには濃い内容だったのではないかな。
- ・カフェの内容が濃かったとしても、URA を研究してきた、じぶんたちの研究会だからこそできた内容だったのではないかな。
- ・初心者用と上級者用などにわけて、二回にわけてもよかったのではないかな。
- ・途中から部屋が暑くなってきた。温度調節に注意すべきだった。
- ・懇親会の会場と講演を行った会場が同じ部屋だった。懇親会の準備ができず、当日ばたばたした。

## メンバー間のやりとりについて

- ・メールは情報を管理するのが大変だったので、facebook のグループ機能を使う方法は良かった。
- ・(facebook のデメリット) 過去の記事を検索する機能がなかった。
- ・スカイプ会議をしながら、メンバー間で議事録を共有できるシステムが便利だった。
  - Google ドキュメントのワープロ機能「文書」を使い、会議中にオンラインで編集して議事録を作成した。
- ・企画段階では、対面で話し合いをした方がよい。書類の校正などのやりとりは、ウェブ上でやると良いかもしれない。
- ・横（異なる専攻間）のつながりを作る機会があると良いかもしれない。



## おわりに

本事業の要である総研大 URA カフェの実施にあたっては、大学院生や研究者の方々を中心に広く周知をかけ、幅広い参加者に足を運んでいただきました。その結果、カフェでのクロストークの議題は、イベントの目的の「参加者自身の研究活動の進め方や将来のキャリア形成の参考に」という範囲に留まらず大きく発展していきました。例えば、URA と研究者の関係や、理系出身 URA と文系出身 URA の得意の違いに着目し、大学の研究コミュニティ全体を考える場面がありました。あるいは、現状の URA の雇用や海外の URA の活動についての質問を深め、日本の大学・研究機関で URA が今後どのような立場を獲得していくのかを考えるひとときもありました。今回のように、学内外を問わず幅広い専門分野の人と対話する機会を積極的に持ち、物事を多様な視点から考える経験が得られることは、総研大の大学院教育の特色のひとつなのではないか、と考えています。

本事業は、各大学・基盤機関の方々の多くのご協力のもと無事終了することができました。この場を借りて、お世話になった皆さまに深く感謝と敬意を表します。金沢大学 先端科学・イノベーション推進機構の鈴木友研究員には、主に金沢大学でのヒアリングと総研大 URA カフェの発表にご協力いただきました。金沢大学でのヒアリングでは、稲垣美幸准教授、鳥谷真佐子助教、佐々木隆太研究員にもご同席いただきました。金沢大学の URA の職務内容や、仕事を進めていく上での考え方を教えていただいたことは、私たちが URA についての理解を深めていくうえで大変参考になりました。信州大学 URA 室室長の杉原伸宏教授には、ヒアリングにご協力いただき、総研大 URA カフェへもご出席いただきました。信州大学の URA が大学全体の経営に深く関わっている姿を見せていただいたとともに、日本の URA(あるいは、ユニバーシティ・アドミニストレーター UA)の今後のあり方について、示唆に富んだご意見をいただきました。大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室の宮田知幸シニア・リサーチ・マネージャーと、岩崎琢哉リサーチ・マネージャーには、大阪大学でのヒアリングにご協力いただきました。大阪大学の URA のシステムはもちろん、おふたりがかつて勤めていた企業で得た経験や視点と今の URA の仕事とのつながりについて、貴重なお話を聞かせていただきました。自然科学研究機構生理学研究所研究力強化戦略室(広報)の坂本貴和子特任助教には、総研大 URA カフェで発表をしていただきました。広報担当者には戦略的思考と営業能力が求められることを、具体的な場面を紹介しながら、参加者に伝えてくださいました。最後に、総合研究大学院大学学融合推進センターの平田光司センター長、七田麻美子特任准教授、奥本素子助教(2015年4月までの所属。現所属は京都大学高等教育研究開発推進センター/特定准教授)、そして学融合推進センター事務職員の方々からは、事業運営にあたり多くのサポートと応援をいただきました。なお、本事業は、総研大学融合推進センターの助成を受けて行いました。

(文責 菊地原沙織)

## 主要参考文献

- ・鳥谷真佐子・稲垣美幸 2011「リサーチ・アドミニストレーターの現状と課題」『大学行政管理学会誌』15:33-40.
- ・齋藤芳子 2013「大学における研究アドミニストレーション職の専門性と能力開発」『名古屋高等教育研究 第13号』
- ・神田由美子・富澤宏之 2015「大学等教員の職務活動の変化」ー「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査」による2002年、2008年、2013年調査の3時点比較ー」『文部科学省 科学技術・学術研究所 調査資料-236』
- ・文部科学省 2014「可能性を最大限に引き出す人材システムの構築～「世界で最もイノベーションに適した国」へ～」『平成26年度版科学技術白書』第一部
- ・金沢大学先端科学・イノベーション推進機構 『URA(リサーチ・アドミニストレーター) 紹介 金沢大学の研究をマネジメントする仕事』
- ・大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 2015『大阪大学リサーチ・アドミニストレーター(URA) 整備事業報告会 資料集』
- ・大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室 2014『URAのためのURAによる副読本』
- ・岩瀬峰代・奥本素子 2014『研究者入門 総合研究大学院大学 総合教育』『研究者入門2013』講義録』 pp40-46.
- ・藤田茂 2015「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」と「研究大学強化推進事業」の現状と課題: URAのキャリアパスを中心に」『研究紀要』89:61-76.
- ・森山工 2007「文化資源使用法」 内堀基光編『文化の資源化』弘文堂 pp.61-91.
- ・Celia Whitchurch et al., 2008 Shifting Identities and Blurring Boundaries: the Emergence of Third Space Professionals in UK Higher Education, Higher Education Quarterly
- ・文部科学省 科学技術・学術制作研究所 2015 「国際的視点からのシナリオプランニング」『第10回科学技術予測調査』



## 編集後記



生命科学研究科 菊地原沙織

URA の方々、そして他専攻の学生に出会い、研究・教育活動について議論した経験は大変貴重でした。ここまで支えてくださった皆さまに心より感謝します。



生命科学研究科 松本悠貴

この活動では、現場で活躍する URA の方々の話を聞くことができました。その中で、これからの大学は、研究者のみならず、彼ら URA やその他大勢の人たちが参画して作り上げていくのではないかと思いました。URA の方々の今後のご活躍をお祈りしています。



物理科学研究科 新宅直人

URA カフェの手伝いとして参加しました。総研大生だけでなく、様々な方と議論することができました。



学融合推進センター 助教 塚原直樹

学生と一緒に 1 年間楽しく活動させていただきました。URA について勉強させてもらい、また、様々な大学の方々と繋がりができるなど、一番恩恵を受けたのは顧問教員の私だったかもしれません。そのような機会を与えてくれた本プロジェクトのみなさん、特に代表の菊地原さんに感謝します。



文化科学研究科 東城義則

本企画の実施にあたり、ご支援ご協力いただきました全ての方々に謝意と敬意を表します。



複合科学研究科 西村(丸尾)文乃

URA について勉強するなかで自分のキャリアについても深く考えることができました。ご支援していただいた方々、研究会メンバーに心より感謝いたします



生命科学研究科 佐々木飛鳥

ほんの少しではありましたが、URA 研究会に携われたことを嬉しく思います。もっと URA が多くの人に知れ渡ってほしいですね。

平成 27 年度 学融合推進センター 学生企画事業申請書

|                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| 所属研究科・専攻名称 <sup>(注)</sup>            | 生命科学研究科 生理科学専攻  |
| 申請代表者（学生）（学籍番号・氏名）                   | 20122051 菊地原沙織  |
| 顧問教員（専攻名称・職名・氏名）                     | 生理科学専攻 教授 池田一裕<br>学融合推進センター 助教 塚原直樹   |
| 事業実施体制                               | 事業担当者（専攻名，学籍番号）：松本悠貴（遺伝学専攻，20131855）<br>事業担当者（専攻名，学籍番号）：坂東隆宏（核融合科学専攻，20131051）<br>事業担当者（専攻名，学籍番号）：丸尾文乃（極域科学専攻，20121653）<br>事業担当者（専攻名，学籍番号）：   |
| 問い合わせ先                               | Tel. 090-9292-1014 e-mail: saorik@nips.ac.jp  |
| プロジェクト名称                             | 研究活動の「これから」を考える<br>ー全国のURA重点大学における研究支援システムの現状調査ー  |
| 平成27年度予算要求額 <sup>(注)</sup><br>(単位：円) | 2,000,000   |
| 申請プロジェクトのキーワード<br>(複数選択可)            | <input checked="" type="checkbox"/> 異分野連携 <input checked="" type="checkbox"/> 社会連携 <input type="checkbox"/> 国際連携<br><input checked="" type="checkbox"/> 学生間ネットワーク形成 <input checked="" type="checkbox"/> 世代間連携   |
| 概 要                                  | <p>本事業では、University Research Administrator（研究支援職員、以下 URA とする）の活動の現状調査を通じて、研究者が研究遂行に際して抱えている問題群を整理し、これからの研究支援活動のありかたを検討する研究会を実施する。総研大生の協力を広く得ながら、多様な背景の参加者が複合的な問題の解決策を模索する場をつくることで、参加した学生のキャリア形成の支援と、問題解決能力の涵養を目指す。</p> <p>現代の研究者は、研究プロジェクトのマネジメントなどに代表される「研究そのもの以外の業務」の負担が増えており、研究に集中するための時間が十分に確保できていないことが指摘されている。この状況を改善し、研究者が研究活動を円滑に行えるようにするため、大学や研究機関は、近年、研究支援のための専門人材(URA)の導入を進めている。一方、URA による研究支援は日本では比較的新しい枠組みであることから、学生が主体的に URA について深く学び、キャリアプランを考える機会、これまでほとんど見られなかった。</p> <p>そこで本事業では、まず、研究支援システムの現状を知るために、文部科学省実施事業の「リサーチ・アドミニストレーター (URA) を育成・確保するシステムの整備」に採択されている大学を訪問し、URA へのインタビューを中心とした調査を行なう。5 箇所の大学を学生 3 名程度でそれぞれ訪問することを予定している。また、希望する学生(3 名程度)を募り、9 月に信州大学で開催予定の URA シンポジウムに参加し、国内外の研究支援システムの実態について情報を収集する。本シンポジウムの参加体験はレポートにまとめ、学融合推進センターホームページへの掲載を依頼するなどして広く学内に発信していく。調査後には一般公開の総研大 URA 研究会（以下、URA 研究会）を開催し、調査において得られた成果を広く共有するとともに、URA が今後対処していく課題を整理する。専攻や大学の枠を超えた多様性に富んだ人材がこの URA 研究会に集まり、活発に意見交換を行なう。これらの活動を通して、URA による支援が大学や研究機関の研究活動を</p> |

より前進させていくためには、今、何が問題となっていて、今後どのような解決策が実践できるのかを、議論を通じて多角的に検討する。

#### 期待される効果等

本事業の実施により、以下の3点について教育的実践的效果が期待される。1点目として、URAは大学院生の今後のキャリアのひとつとして挙げられるため、学生は、本事業を通してURAの現場を知り、自身のキャリアプランニングをより現実的に即して考える機会を得ることができる。2点目として、URAによる世界的研究拠点の整備、専門分野の強化、そして地域貢献や産学官連携の強化などの現場を実際に調査することで、現代日本の高等教育機関における研究支援活動の現状、および異分野連携や社会連携の場面でのURAの役割を把握することができる。また、総研大を修了したURA職員の協力を得てこれを行なうことで、世代間連携も図られる。3点目として、URAによる研究支援システムの問題整理を学生自身が行なうことで、学生側の問題解決能力の養成が図られる。そして調査の成果は予定されているURA研究会において、専攻や大学の枠を超えて共有・議論される。このことは、通常の研究活動では得られない、複雑かつ多様性に富んだ議論を行なう機会として有益である。同時に、URA研究会は複数の専攻の総研大生が参加することから、世代を超えた学生間ネットワークの形成の機会になることが期待される。本事業の一連の活動を通じて、学生はコミュニケーション能力、協働による事業企画能力、特定課題の問題解決能力を涵養することができる。

#### 申請代表者の指導教員の承認

(自筆署名) 注2)

#### 推薦理由(申請代表者が所属する専攻の顧問教員)

本事業の実施を通して、学生は所属基盤機関では得ることのできない人脈の形成ができるとともに、大学院修了後のキャリアパスの課題について学ぶことができる。具体的には、はじめに学生はURAの仕事に触れ、異なる専門性を持つ人材同士が互いに協力しあっていくための実践的な取り組みを学ぶことができる。次に学生自身のキャリアパスを考える機会を、URAへの調査を通じて得ることができる。そして、今後URAが担っていく役割について協議する活動では、総研大生が将来、高度な専門性を発揮して社会に貢献していく場面で要求されるであろう問題解決能力を養うことができる。さらに、URA研究会という形で専攻および大学の枠を超えた大学院生、そして一般の方々が集まり、互いの意見を交換しあう場に参加することにより、学生は多様な分野の人びととの人脈をつくることができ、視野が広がることが期待される。そして、本事業で出会う人びととの交流から、学生はさまざまな専門分野の実情に即したキャリアパスの問題を学ぶことができ、このことは総研大の目標とする文理融合を可能にする柔軟な思考を持った人材育成につながる。これらは本学の教育目標の一つである「深い専門性と広い視野を併せ持ち、異分野連繋的・社会連携的な視点を持つ国際的研究者人材を育成すること」に即しているため、本事業を学生企画事業として推薦する。

(自筆署名) 注2)

水 中 一 裕

注1) 平成27年度の申請額の経費明細について別紙1「予算執行計画」に記入すること。

注2) 応募の際、顧問教員・指導教員が公務出張等不在のため、自筆署名を求めることが出来ない場合、メール等による教員の承諾が確認できるものを提出してください。(後日、署名入りの申請書をPDFファイルの送付、又は原本の郵送により提出ください。)

なお、指導教員と顧問教員が同一の場合は、指導教員の承認欄への署名は不要です。

※記入スペースが足りない場合には、適宜、拡張して記入してください。

大学院生のキャリアプランニング支援事業

事業責任者 総合研究大学院大学生命科学研究科 5 年一貫制博士課程 4 年 菊地原沙織

テーマ

院生のための URA キャリアデザイン事業

成果目標

研究支援の現状や、URA の仕事に必要とされる専門的なスキルなどを学生が正しく理解し、学生の今後のキャリア形成のための参考にする。

事業の基本システム

事業の背景

近年進む URA の導入

研究者 URA

研究活動の活性化

・環境整備  
・マネジメント

しかし、現状の大学院教育では、研究アドミニストレーションへの造詣を深める経験がほとんどない。

コンセプト

研究活動の「これから」を考える

ターゲット

大学院生

組織概要・収支概要

総合研究大学院大学（総研大）

事業申請 → 審査・採択 → 総研大 URA 研究会  
学生スタッフ 4 名、教員 1 名  
(2015 年 4 月現在)

立ち上げ → 予算配分 → 総研大大学院生

| 予算執行計画（採択額：1,550,000 円） |           |                   |
|-------------------------|-----------|-------------------|
| 内訳                      | 金額        | 詳細                |
| 大学訪問                    | 366,000 円 | 旅費、URA への謝金       |
| URA シンポジウム              | 228,000 円 | 旅費                |
| 総研大 URA 研究会             | 560,000 円 | 旅費、会場費            |
| 運営諸経費                   | 366,000 円 | 運営会議<br>運営アルバイト雇用 |





# 参加募集!

2015年度学生企画 研究活動の「これから」  
-全国のURA重点大学における研究支援システムの現状調査-

今年の総研大学生企画、キャリア  
プランニング事業するんだって?

うん、URAをしている先輩を  
訪問したりする予定なんだ

ええと、聞きたいんだけど

URAってどんな仕事?

よく知らないけど、研究者を  
助けている、調整役って感じ  
かな?

それって、たとえば?

先輩の話では、研究のマネジメントを  
したり、産学連携のバランスをとる  
ような仕事、って言ってたよ

研究者とは、どう違うの?

## 調べてみなきゃ、わからない

ご連絡をお待ちしています  
E-mail: 2015.std.project@gmail.com

総研大学生企画 2015の  
ホームページへジャンプ!  
<http://cpis.soken.ac.jp/ura/index.html>



## プロジェクトの内容

博士号取得者の新しいキャリアパスのひとつでもあるURA(右記参照)の仕事についての調査を行います。この活動で、各基盤機関での研究活動では得ることができない、分野を超えた人たちと知り合う機会を得ることもできます。これまでの自分がいた枠を超えて、新しい仲間と出会い、一緒に今後のキャリアを考えてみませんか?

代表者 菊地原沙織(生理科学専攻4年)  
2015.std.project@gmail.com

## URAとは

University Research Administrator という、研究活動を支援するための専門職です。近年、大学や研究機関はURAの導入を進めていて、URAは研究者が研究に集中できるような環境の整備を行なっています。URAは研究プロジェクトのマネジメント、産学連携の支援、大学の研究成果を発信するメディア対応など、広い範囲で活躍中です。大学院で鍛えられる高度な専門性が求められる仕事も多く、博士号取得者のキャリアパスのひとつとして注目されています。

## 募集内容

興味のある部分のみへの参加でもOK!

### 7月 URAへのインタビュー (1泊2日。大阪大) 2名募集

各大学のURA職員に実際に会いに行き、インタビュー調査を実施します。

### 9/1-/2 URAシンポジウム (1泊2日。信州大学) 3名程度募集

URAシンポジウムに参加し、国内外の研究支援の情報を収集します。  
後日、参加体験はレポートにまとめ、学融合推進センターホームページへの掲載を依頼するなどして、発信していく予定です。

### 11月 総研大URA研究会 (日帰り。場所未定) 20名募集

公開の研究会を開催します。専攻や大学の枠を超えた大学院生や一般の方々に集まっていただき、研究者とURAが、これからどのように協力して研究を進めていくかを考えたり、URAスキルを身につけられるような大学院教育のプログラムを学生自身が考案するワークショップを行ないます。

### (通年) プロジェクトの運営 若干名募集

プロジェクトの運営メンバーは企画立案から実施、調査結果の解析、そして、報告書作成までの一連の活動を行ないます。期間は1年間(2015年4月から2016年3月)で、お互いの学位研究とのバランスをとりながら、無理のない範囲で進めていきます。4月現在、これまでに運営の経験があるメンバー4名で企画を立ち上げたばかりです。はじめての方もぜひ、一緒に挑戦しましょう!

## 学生企画とは

学生が、課題を発見し適切な方法で解決していく、「実践的な問題解決能力」を備えた研究者へ成長することを支援するための、総研大独自のプログラムです。

総研大の学生が主体となり計画し、ヒアリング審査を経て予算を獲得して、活動します。

## 第 1 回 RA 協議会 参加者募集案内 (総研大内対象)

開催日時 :2015.09.01-2015.09.02

開催場所 : 信州大学長野 (工学) キャンパス

大会 URL: <http://www.rman.jp/>

### ■募集の趣旨

研究活動をマネジメントする専門職、「リサーチアドミニストレーター (URA)」が全国から集まる年次大会 (第 1 回 RA 協議会) に一緒に参加しませんか。

本大会は、全国の大学の URA が集まり情報を交換する場です。自身の将来のキャリアの選択肢として、グラント申請の支援、大学の経営・マネジメント、研究活動の広報、大学の地域連携、産学連携の調整役、大学内の教育プログラムの企画立案等の仕事に関心がある学生の参加を募集します。研究室の中ではなかなか得られない情報に触れ、他専攻、他大学に広い人脈を築くことができる絶好のチャンスです。また、本大会では、平成 27 年度学生企画事業「総研大 URA 研究会」の学生スタッフが、活動内容を発表します。本学学生の見学希望については、旅費・大会参加費の支給をいたしますので、ご興味のあるかたは、ぜひお申し込みください。

### ■参加募集要項

定員 4 名

対象者 本学学生

使用言語 日本語

### ■参加申し込み方法

参加希望の方は、以下の内容をメール本文にご記入の上、件名を「RA 協議会参加希望」として下記にお申し込みください。

- ① 所属研究科 / 専攻
- ② 学籍番号
- ③ 氏名 & よみがな
- ④ 性別
- ⑤ メールアドレス

※総研大から初めて旅費等の支給を受ける方、登録済みの口座情報に変更等がある方は、添付の「口座振込み依頼書」も、メールに添付して提出してください。

申込〆切: 平成 27 年 8 月 7 日 (金) 正午

申込先: 総研大 URA 研究会: 2015.std.project(at)gmail.com

※(at) は @ に変換してください。



## ■スケジュール

2015 年 9 月 1 日

12:20 集合（JR 長野駅 2 番のりば日赤病院・ビックハット方面、安茂里、信州新町方面）

13:10-14:40 口頭発表 1

15:00-16:30 口頭発表 2

16:50-17:50 総会

18:30-20:00 情報交換会ホ テルメルパルク長野

※ 情報交換会への参加は自由です。参加される場合、会費（5000 円）は私費になるため、活動費からの補助はありません。各自で会費をご用意ください。

2015 年 9 月 2 日

9:00-10:30 口頭発表 3

10:50-12:20 口頭発表 4（別会場：ポスター発表）

13:20-14:50 口頭発表 5

15:10-16:00 クロージング

16:00 現地解散

## ■宿泊について

各自で手配し、宿泊先を総研大 URA 研究会にお伝えください。

ホ テルに宿泊される方には宿泊費として一律 10,000 円が補助されます。

友人宅などホテル以外の場所に宿泊された場合は、宿泊費の補助はありません。

## ■（重要）参加者へのお願い

大会終了後、「参加体験レポート」の電子ファイルをメールにて 2015.std.project(at)gmail.com（(at) は @ に変換してください）宛にご提出ください。

メー ルの件名は「RA 協議会レポート提出 - 名字」という件名でお願いいたします。

レ ポートには、

1. RA 協議会に参加した感想

2. あなたの専門分野にはどのような URA が必要と考えられますか。

の両方の点について記述してください（800 字以上）。形式は自由です。

提出の期限は 9 月 23 日（水・祝）です。

「総研大 URA 研究会」の活動は、総研大学融合推進センターからのグラント支援により運営されています。したがって、事業の成果を総研大に報告するために、参加者のみなさまからのレポート提出のご協力はとても重要です。提出していただいたレポートの内容は、後日 web で公開させていただくとともに、報告書作成の資料として使用させていただきますことをどうぞご了承ください。

## 第1回 RA 協議会 発表要旨

### 大学院生の目を通してみた URA—総研大における学生企画—

菊地原沙織<sup>1)</sup>、○東城義則<sup>2)</sup>、松本悠貴<sup>1)</sup>、西村（丸尾）文乃<sup>3)</sup>、坂東隆宏<sup>4)</sup>、塚原直樹<sup>5)</sup>

総合研究大学院大学 1) 生命科学研究科 2) 文化科学研究科 3) 複合科学研究科  
4) 物理科学研究科 5) 学融合推進センター

本発表ではまず、大学院生たちが URA について調査した結果を報告し、URA の仕事への理解を深めるに至った率直な気づきや所感を述べる。続いて、博士号取得予定者のキャリアパスとして URA を視野に入れ、URA に求められる役割について考察する。

URA は近年大学や研究機関での導入が進められており、昨今の研究支援体制において中枢的な役割を担っている。一方で、これまでは大学院生が主体的に URA について深く学び、URA を視野に入れてキャリアを考える機会ほとんど見られなかった。そこで、大学院生が将来のキャリアとして URA を検討することを主軸として本事業を開始した。本発表では、学生が研究支援の現状と課題を認識し、URA の役割を深く理解することを目的として行った文献調査およびヒアリング調査の成果を報告する。

調査にあたっては、文部科学省実施事業の「リサーチ・アドミニストレーター（URA）を育成・確保するシステムの整備」の採択大学のうち、金沢大学、信州大学、大阪大学の3大学に協力を依頼し、URA の業務内容についてヒアリングを行った。金沢大学では、教育・研究・国際の3領域で大学の持つリソースを最大限活かすためには URA 相当職が必要、と執行部が考え、早期より URA による支援が行われてきた。信州大学では、大型予算の獲得に URA による支援を集中する戦略を採用するとともに、地元企業との産学連携を展開して独自の医工連携を開拓していた。大阪大学では、大学全体のことをとり扱う本部 URA、各研究科等に所属して研究者を支援する部局 URA、そして産学連携担当部署で業務を分掌し、必要に応じ連携する体制を採用することで、国際的研究拠点の整備が進められていた。

調査を経て私たちは、URA による研究支援は大学の特色に合わせて緻密に最適化されていることに気づき、URA に求められる役割について以下のように考察した。①URA は、持続可能な研究環境を整備していくために、人と人をつなぎ、異なる立場の者同士の協働を支援する役割を持つマネジメント職である。②URA 業務に求められるスキルや資質には、博士課程で鍛錬される問題解決能力と質的に類似する部分が見受けられる。すなわち、最短かつ最適な戦略を立案し、自ら周囲にはたらきかけて実行していく行動力が、URA には求められると考えられる。

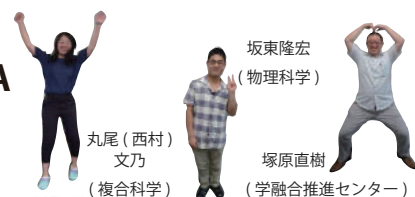
大学や研究機関が、それぞれの持つ特色を生かし社会に貢献していくにあたり、URA は、研究活動がより効率的に、円滑に進められるよう支援する重要な役割を担っている。したがって、今後も研究活動に貢献し続けたいと考えている博士号取得予定者にとって、URA は将来のキャリアの一つとして有力であると考えられる。

#### 参考文献：

[1] 齋藤芳子 2013 「大学における研究アドミニストレーション職の専門性と能力開発」『名古屋高等教育研究』13:37-51



## 大学院生の目を通して見た URA - 総研大における学生企画 -



### 概要

総合研究大学院大学（以下、総研大）における学生主体型企画「総研大 URA 研究会」の活動を報告する。文部科学省の URA 整備事業に採択されている大学から3校（金沢大学、信州大学、大阪大学）に協力を依頼し、URA 業務の現状を知るためのヒアリング調査を行った。本発表ではまず、大学院生たちが URA について調査した結果を報告し、URA の仕事への理解を深めるに至った率直な気づきや所感を述べる。続いて、博士号取得予定者の将来の職業として URA を視野に入れ、URA に求められる役割について考察する。

### 背景:URA の現場から、大学院生が学びたいこと

自身の研究を行っているなかで、異分野の研究者間での**共同研究**や研究成果を**社会へ還元**する場では、立場の異なる**人と人をつなぐ人材**が必要とされていることを認識した。

研究をマネジメントし、研究活動を活性化する専門職である URA の存在を知った。研究環境を整備・維持する仕事に関心がある博士課程学生にとって、URA は**学位取得後の進路として検討したい職業**である。しかし、現状では、私たち学生や、ポスドクの時期に URA の**現場を知る機会は少ない**（斎藤 2013）。

本調査では、URA が**どのように研究活動を支援しているか**、その現場を知ることが目的として、3大学の URA にインタビューを行った。この調査結果は、学生やポスドクを対象とした研究会を通して学外に対しても情報を共有する予定である。



### 事業内容

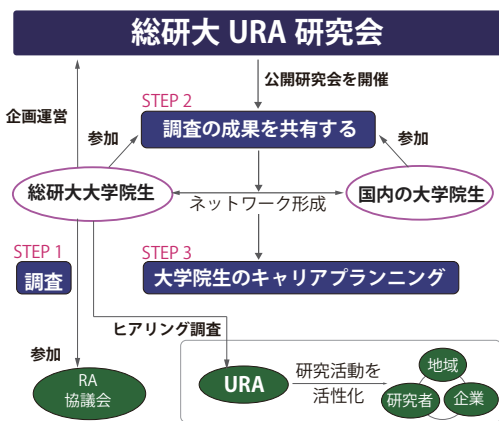
#### 大学院生のキャリアプランニング支援事業

#### 成果目標

大学院生が、研究支援の現状を認識し、そして URA の仕事に必要とされる専門的スキルなどを深く理解することを通して、学生自身の今後のキャリア形成の参考にすること。

#### 事業のシステム

研究支援の現状について、文献調査、URA へのヒアリング調査、RA 協議会への参加を通して理解を深める。後日、公開の研究会を開催し、調査の成果を学内外の大学院生と共有する。これらの活動を通して、大学院生が研究活動の「これから」を見据えて、自身のキャリア形成を考える機会を提供する。



#### ヒアリング調査の様子



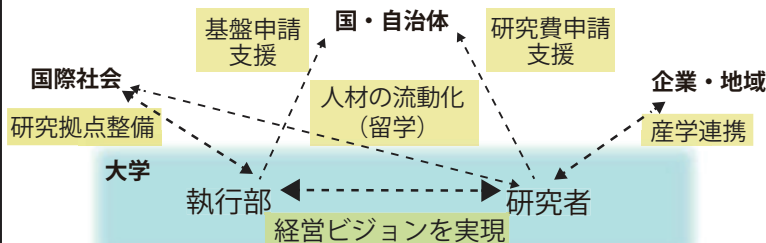
### 総研大 学生企画事業とは？

総研大は、人文・理工の多様な学術分野の大学共同利用機関を基盤機関とした学部を持たない大学院大学である。総研大の教育研究理念に基づき、広い視野を持ち、実践的な問題解決能力を持つ研究者を育成するため、総研大生が主体となって研究科の枠を越えて企画実施する事業に対し、審査を経た上で、総研大が支援を行っている。本事業「総研大 URA 研究会」についても発案、企画、交渉、実施、報告までの全てを総研大生が行っている。

### 大学院生の目を通して見た URA

#### URA は、立場の異なる人と人をつなぎ、持続可能な研究環境を整備していた

#### 1. URA の実務内容の模式図（文献調査およびヒアリング調査より）



#### 2. 調査に参加した大学院生の感想

現在の大学には、大学経営に貢献できる人材が必要とされていることを知りました。

URA の仕事といえば、研究における大学の強みを分析したり研究費獲得支援を行ったりしていると考えていました。実際はアウトリーチ活動といった研究と社会との繋がりを保つ活動もされており、自分の URA 像が一変されました。

URA が、各大学が必要としている研究支援を、それぞれの大学の特色に合わせて綿密に検討し、実行している様子が印象的でした。自身は脳科学研究に携わっていることから、共同研究プロジェクトを進めていくためには、専門分野の異なる研究者が円滑に連携できる体制を整えていくこと、そして研究から得られた成果を社会へと還元していく（例えば、神経系疾患の克服のために応用する）仕組みを強化することが必要と感じていました。各大学の URA の取り組みから得たヒントを今後の研究生活に役立てていくとともに、将来の職業として URA を検討してみようと考えています。

私は狩猟文化、環境史の研究に従事する大学院生です。今回の調査を通して、私は URA について次のような印象を抱きました。URA は、学内外を問わず多様な人や集団、団体と横断的に関わる仕事をしています。この仕事では、ヒアリングやアンケートによる調査分析、データベースの作成管理、倫理規定や法令の遵守（内面化）といった多岐にわたる作業や手続きが求められます。そしてこれを実行するには、各場面に合わせた知識とスキルの経験的な学習が必要だと思えます。多角的な活動を分掌して担いながら、大学で公共的に利用可能な“リソース”を生産・運用・管理する専門的な職能集団、それが URA ではないか、そう感じています。

### 考察: URA に求められる役割

- ① URA は、持続可能な研究環境を整備していくために、人と人をつなぎ、**異なる立場の者同士の協働を支援する役割を持つマネジメント職**である。
- ② URA には、**最短かつ最適な戦略を立案**し、自ら周囲にはたらきかけて実行していく、**行動力**が求められると考えられる。これは、博士課程で鍛錬し、身に着的問題解決能力と質的に類似している。

### 結論

大学や研究機関が、それぞれの持つ**特色を生かし**社会に貢献していくにあたり、URA は、**研究活動がより効率的に、円滑に進められるよう支援**する重要な役割を担う。したがって、今後も研究活動に貢献し続けたいと考えている博士号取得予定者にとって、URA は将来の職業として有力だと考えられる。

### 謝辞

金沢大学 先端科学・イノベーション推進機構

信州大学 産学官・社会連携推進機構 リサーチ・アドミニストレーションセンター

大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室

本事業は、総合研究大学院大学学融合推進センターの助成を受けて行われました。

稲垣聖幸 准教授  
島谷真佐子 助教  
佐々木隆太 博士研究員  
鈴木友 博士研究員

杉原伸宏 センター長（教授）  
宮田知幸 シニア・リサーチ・マネージャー  
岩崎琢哉 リサーチ・マネージャー

## 総研大 URA カフェ 参加者募集案内

開催日時 :2015.11.14. Sat.

開催場所 : イオンコンパス東京八重洲会議室 Room D

会場 URL: <http://www.aeoncompass-kaigishitsu.com/tokyoyaesu/access/>

### ■募集の趣旨

秋も深まる今日この頃、土曜日の午後にふらっとカフェでコーヒープレイク♪そんな気軽さで参加できて、自分の研究活動や将来のキャリアパスについて、いろいろな専攻のひとたちと楽しく語ることができるイベントのご案内です。

突然ですが、「URA」という方々のことを、あなたはこれまでに耳にしたことはありますか。「初めて聞いたよ」という人も、「うちの研究所に URA 室が最近できたから、知ってるよ」という人もいらっしゃるでしょう。URA は University Research Administrator の略称で、「教育職員と事務職員の間に位置づけられる、第三の職」として大学関係者の中で大注目のホットな職なんですよ。

URA は、たとえば、

- 研究者が研究費を獲得できるよう、申請書の作成をサポートする
- 研究の成果を、社会へと発信する（広報）
- 海外との連携を進めて、大学の研究や教育を充実させていく
- 地域や企業と協力して、社会貢献事業を行う
- 大学経営に携わる…

などなど、さまざまな場面で研究活動と深く関わっています。

本イベントでは、「URA は、実際にはどのような活動をしているのかを知りたい!」という思いで総研大の外に調査に行ってきた学生有志たちが、現職の URA から聞いてきたこと、そして考えたことを紹介します。また、今回のスピーカーには、総研大の修了生で、現在 URA として大学や研究機関で活躍している方も呼びしています。総研大を修了し、なぜ URA を選択したのか、ざっくばらんに質問してみてください。

URA を知ることは、大学や研究機関を知り、研究活動を俯瞰してみることにもつながります。きっとあなたの今の研究活動にも役立つヒントが得られるはずです!

なお、本学学生の参加希望については、日帰りの旅費を支給いたします。

### ■定員 20 名 (先着順)

### ■対象者 学生、研究者、URA に興味のある方

## ■使用言語日本語

## ■参加申し込み方法

参加希望の方は、以下の内容をメール本文にご記入の上、件名を「総研大 URA カフェ参加希望」として下記にお申し込みください。

- ① 所属研究科 / 専攻
- ② 学籍番号
- ③ 氏名 & よみがな
- ④ 電話番号
- ⑤ メールアドレス

※総研大から初めて旅費等の支給を受ける方、登録済みの口座情報に変更等がある方は、添付の「口座振込み依頼書」も、メールに添付して提出してください。

申込〆切: 平成 27 年 10 月 30 日 (金) 正午

申込先: 総研大 URA 研究会: 2015.std.project(at)gmail.com

※(at) は @ に変換してください。

## ■スケジュール

2015 年 11 月 14 日 (土)

12:30 開場・受付

13:00-13:10 開会のあいさつ / 開催趣旨について

13:10-15:10 第一部総研大からみる URA

- ・ URA に着目する背景 / URA 研究会の活動報告
- ・ 総研大 URA 類似職の活動 / 大学共同利用機関 URA の活動

15:10-17:00 第二部 URA からみる、つながる、ひろがる

- ・ フロア内でクロストーク

17:00-17:30 URA からの講評 / 閉会のあいさつ

17:30-19:30 懇親会 (同会場)





平成 27 年 11 月 14 日 土

13:00 ~ 17:30

■会場：東京八重洲会議室  
Room D

■参加費：無料

■定員：30名

■対象：学生・研究者・  
URAに関心のある方



niversity



esearch



dministrator



URAって  
どんな職業ですか？

URAに  
求められることは？

#### ● 申し込み ●

氏名・所属・電話番号・メールアドレスを明記のうえ、下記宛先までメールにてお申し込みください。申し込み締切は 10 月 30 日 (金) です (先着順)。

2015.std.project@gmail.com

#### プログラム

12:30 - 13:00 受付

13:00 - 13:10 開会の挨拶／開催趣旨について

13:10 - 15:10 第 1 部 総研大からみる URA

- URA に着目する背景／URA 研究会の活動報告
- 総研大 URA 類似職の活動／大学共同利用機関 URA の活動

15:10 - 17:10 第 2 部 URA からみる、つながる、ひろがる

- フロア内でクロストーク

17:10 - 17:20 講評／閉会の挨拶

- 終了後、懇親会を予定しています。

#### 会場へのアクセス

東京八重洲会議室 東京都中央区京橋1-1-6 越前屋ビル4階



▶ 東京駅より

① JR 東京駅八重洲中央口  
より徒歩4分

② 東京駅直結の八重洲地下  
街より、24番出口を出て  
目の前

▶ その他、東京メトロ日本橋駅・  
同京橋駅より徒歩2～3分

主催：総研大 URA 研究会

(平成 27 年度 総合研究大学院大学 学生企画事業「研究活動の「これから」を考えるー全国の URA 重点大学における研究支援システムの現状調査ー」)

総研大 URA カフェ (2015. 11. 14. Sat) プログラム

13:00～13:05 開会あいさつ・開催趣旨の説明

第一部 総研大からみる URA

13:10～13:30 発表①

演者：敬称略

いま、URA を知ること

松本悠貴

URA の存在基盤をさぐる

-大学における持続可能な研究環境の構築-

東城義則

13:30～13:50 発表②

研究活動の支援のありかたは、大学の特色により多様

菊地原沙織

13:50～14:10 質疑応答・休憩

14:10～14:30 発表③

研究・教育支援職に片足突っ込んだら世界が広がった

塚原直樹

14:30～14:50 発表④

生理研広報のお仕事と URA

-大学共同利用機関として考えること-

坂本貴和子

14:50～15:10 質疑応答・休憩

## 総研大 URA カフェ (2015. 11. 14. Sat) プログラム

### 第二部 URA からみる、つながる、ひろがる

15:10～15:40 招待講演

講師:敬称略

リサーチ・アドミニストレーター (URA) 職について

鈴木友

15:40～17:00 クロストーク

17:00～17:10 休憩

17:10～17:25 URA による講評

17:25～17:30 閉会あいさつ

### 懇親会

17:30～19:30 イオンコンパス東京八重洲会議室 RoomD (カフェと同会場)

#### 講師プロフィール 鈴木友 様 (金沢大学 URA)

##### 業務内容

外部資金申請支援ほか

##### ご経歴

2007 年 東京理科大学 理工学部 物理学科卒業

2013 年 総合研究大学院大学 高エネルギー加速器科学研究科  
素粒子原子核専攻修了

2013 年-2014 年 高エネルギー加速器研究機構 研究支援員

2014 年-現在 金沢大学 先端科学・イノベーション推進機構 博士研究員

2015.11.14@東京

# いま、URAを知ること

松本悠貴(総研大・遺伝学専攻)

引用文献 文献1: 文部科学省, 2014, 平成26年 科学技術白書, 文部科学省.  
文献2: 小林傳司ら, 2013, 研究する大学: 何のための知識か, 岩波書店.

1

# 私の立ち位置

大学の教員になりたい!  
教育・研究・社会貢献

なぜ、いまURAを知ろうと思ったのか?

- 大学や研究の歴史・現状を知る
- そこから将来を予測できる

2

# 大学は何をすところか

## 教育 と 研究

→人材育成や社会貢献

3

社会の成熟に伴い、高度人材が必要とされている

グローバル化 ニーズの多様化

## 知識の専門化

深い専門知識を持つ高度人材(博士号取得者)の確保と活用をすべき

4

# スーパーマン的人材が求められている

基本的な研究能力  
+  
統括能力や教育能力

多様なスキルの習得が必要

5

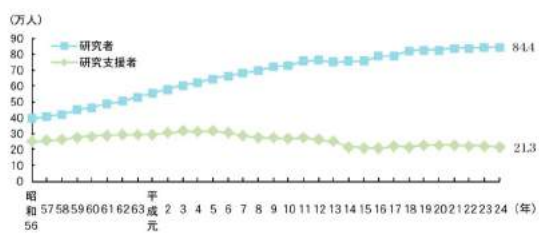
# とはいえ

スーパーマンの数は限られる

## 研究支援者が必要

6

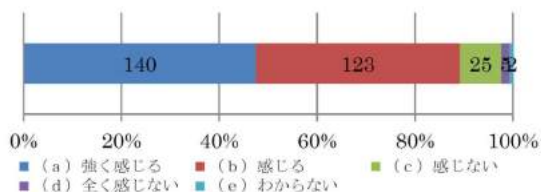
## 日本国内の研究支援者数の割合およびその絶対数は減少傾向にある



日本における研究支援者数の推移(文献2)

研究支援者:技術職員(テクニシャン)・秘書

## 学部長レベルの研究者の意識調査では、大分部分がURAが必要であると感じている



リサーチアドミニストレーターを配置する必要性に関するアンケート結果(文献2)

※ただし、現在はURAがより浸透しているため、この結果が変わっていると思われる

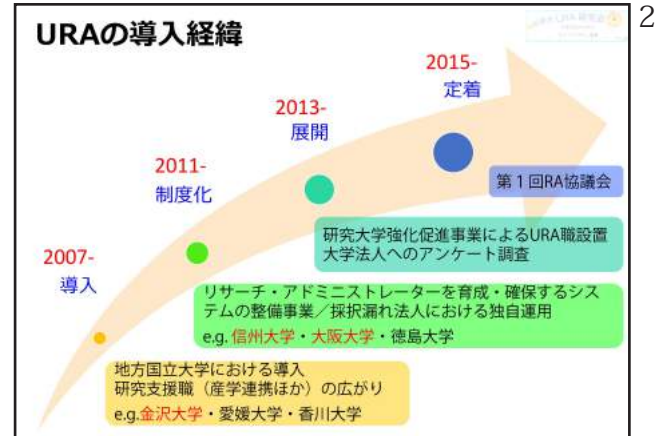
## まとめ

1. 大学の在り方は社会に影響を受け、教育・研究機関に変わってきた
2. これからの研究者は多様なスキルの習得が必要
3. 研究支援職(URA)は今後ますます必要

この後、東城さんからURAについての話

引用文献 文献1: 文部科学省. 2014. 平成26年 科学技術白書. 文部科学省.  
文献2: 小林博司ら. 2013. 研究する大学: 何のための知識か. 岩波書店.





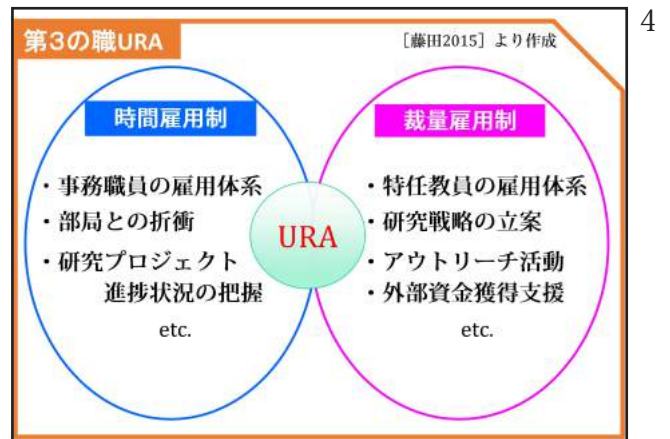
3

### 第3の領域—専門職の養成 [Whitchurch2008, 大場2013]

■“third space” [Whitchurch2008]

- 求められる複合専門職（地域連携、学習支援…）
- 4つ類型・あり方
  - 領域限定型 (bounded) 特定の研究領域に根差した業務
  - 領域横断型 (cross-boundary) 戦略的に設定された領域内の業務
  - 領域超越型 (unbounded) 領域を問わない広域的な業務
  - 複合型 (blended) 専門職と研究職の兼業

一般的な研究職



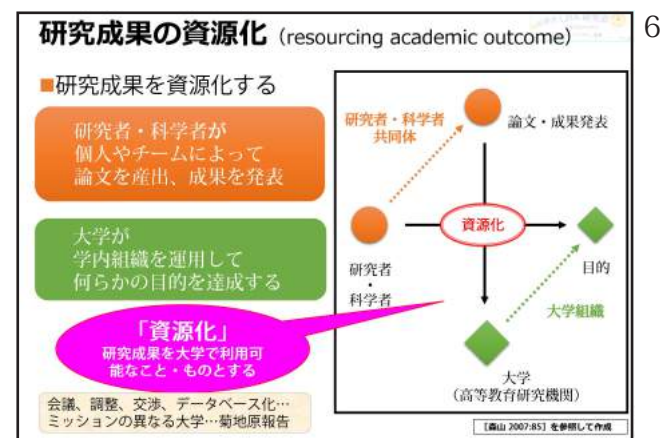
5

### URAの職務内容①

■URA職分の分類／URAの配置部局

- ① 産学連携・知的財産管理
- ② 競争的資金の獲得を中心とする研究戦略
  - 【多数の大学】学長や研究担当理事直轄の本部組織にURAを配置
- ③ 教育研究プログラムの運営
  - 【2011東大】グローバルCOE採択部署にURAを配置
  - 【2014北大】グローバルサイエンスキャンパス採択による教育事業支援

[鳥谷・稲垣2011] など



## 実践的？公共的？URA？

### ■環境学の研究

- 文理融合の共同研究チーム
- 科研費・財団助成金
- 行政・各種団体との協働
- アウトリーチ活動

### ■研究者としての自分自身

- 調査する・研究する・発信する
- 取りまとめる・課題を発見する



8

## 主要参考文献

- 小林博司 2015『知の構造転換と大学の役割』山脇司編『科学・技術と社会倫理—その統合的思考を探る』東京大学出版会 pp.175-190.
- 島谷真佐子・稲垣美幸 2011「リサーチ・アドミニストレーターの現状と課題」『大学行政管理学会誌』15:33-40.
- 広田照幸ほか編 2013a『研究する大学—何のための知識か』岩波書店.
- 2013b『組織としての大学—役割と機能をどうみるか』岩波書店.
- 藤垣裕子 2003『専門知と公共性』東京大学出版会.
- 藤田茂 2015「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」と「研究大学強化促進事業」の現状と課題：URAのキャリアパスを中心に」『研究紀要』89:61-76.
- 森山工 2007「文化資源使用法」内堀基光編『文化の資源化』弘文堂 pp.61-91.
- 山野真裕 2014「学際研究進展と大学組織改革の相互作用—東京大学における学際研究教育とURA配置の事例—」『研究技術計画』29（2/3）：132-143.
- 矢野正晴・村上壽枝・林輝幸 2014「我が国のリサーチ・アドミニストレーターの現状と制度設計—東京大学の事例を中心として—」『大学論集』45:81-96.
- Celia Whitchurch 2008 Shifting Identities and Blurring Boundaries: the Emergence of Third Space Professionals in UK Higher Education, *Higher Education Quarterly*, 62(4):377-396.

9

1

## 総研大URA研究会の活動目標

URAによる研究支援の現状を調べ、  
博士学生の今後の研究活動の進め方や  
将来のキャリア選択の参考にする

2

## Today's contents

- ・ 調査報告(金沢大、信州大、大阪大)  
URAへのヒアリングで、何がわかったか
- ・ 活動を経て、考えたこと

3

## Today's contents

- ・ 調査報告(金沢大、信州大、大阪大)  
URAへのヒアリングで、何がわかったか

URAは…

- ① 研究活動にどのように関わっているのか
- ② 将来のキャリアとしてどのように捉えられるのか

4

## 大学により、URAのありかたは多様だった

| 金沢大  | 信州大   | 大阪大   |
|--|---|---|
|  |  |  |
| 教育・研究・国際<br>3領域の力を<br>バランスよく向上   | 10年先を見据え<br>“選択と集中”   | 国際拠点形成を<br>目指す中央集権型<br>システム   |

5

## 金沢大学のURAへのヒアリング


| 金沢大   | 信州大   | 大阪大   |
|---|---|---|
|  |  |  |
| 教育・研究・国際<br>3領域の力を<br>バランスよく向上  | 10年先を見据え<br>“選択と集中”   | 国際拠点形成を<br>目指す中央集権型<br>システム   |

6

## 金沢大1. URAによる研究申請支援のプロセス

```

graph TD
    A[情報収集] --> B[申請者への説明]
    B --> C[締切までのスケジュール確認]
    C --> D[申請書添削]
    D --> E[ヒアリング練習会]
    
```





## 金沢大2. URAになって身につけたこと

**情報の蓄積** 事務職員は2～3年で移動するが、URAは長年の経験を生かして学内の情報を効率的に集めることができる。

**会議の運営** 今日はどこまで決めるか、皆に示す。テンポよく決めるべきことを決める。

ゴールに向かって、何をしていかなければならないかを考える  
**思考プロセス**は、研究活動と一緒に



## 信州大学のURAへのヒアリング

金沢大



教育・研究・国際  
3領域の力を  
バランスよく向上

信州大



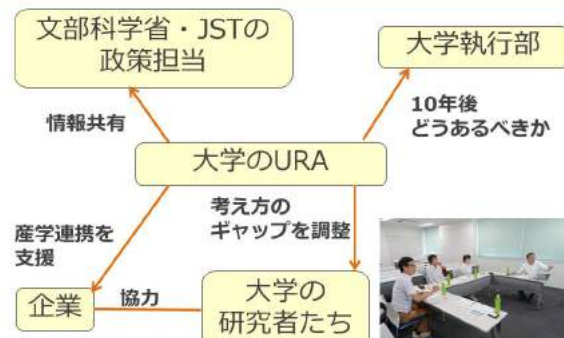
10年先を見据え  
“選択と集中”

大阪大



国際拠点形成を  
目指す中央集権型  
システム

## 信州大 1. 10年後のあるべき姿に向けて行動



## 信州大 2. どのようなURAが生き残っていくか

**マネジメントのセンス**  
先を見通す力  
人と接する能力



## 大阪大学のURAへのヒアリング

金沢大



教育・研究・国際  
3領域の力を  
バランスよく向上

信州大



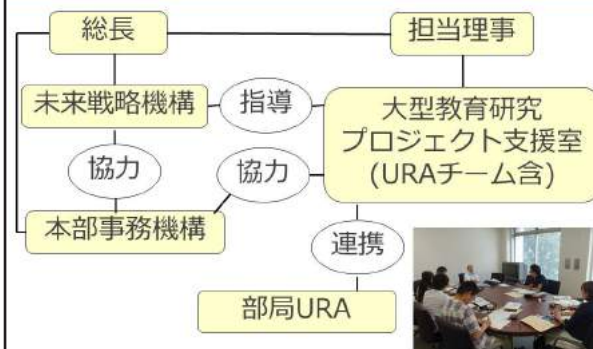
10年先を見据え  
“選択と集中”

大阪大



国際拠点形成を  
目指す中央集権型  
システム

## 大阪大1. 大学が掲げるビジョンを実現する機構



13

## 大阪大2. 情報を取り扱うURAの立場から

情報を整理・解析するURAの仕事

異分野の組み合わせ → 今までの経験だけでは判断できない課題 → 大学の見解




14

## 大阪大2. 情報を取り扱うURAの立場から

情報発信(広報)のポイント

誰の為に行われた研究か?  
研究者自身の為  
社会の為

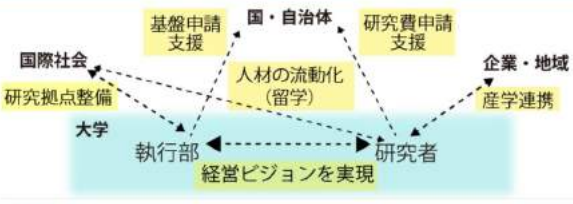
どのような種類の研究か?  
提案型(若手に多い)  
受託型(経験豊富な先生に多い)



15

## 小括 URAが担当する業務の全体像

引用：大学院生の目を通して見たURA(第1回URA協議会, 2015 Sept.)



URAとは…  
異なる立場の者同士の協働を支援する  
役割を持つマネジメント職



2015.9.2ポスター発表

16

## Today's contents

- ・ 調査報告(金沢大、信州大、大阪大)  
URAへのヒアリングで、何がわかったか
- ・ 活動を経て、考えたこと

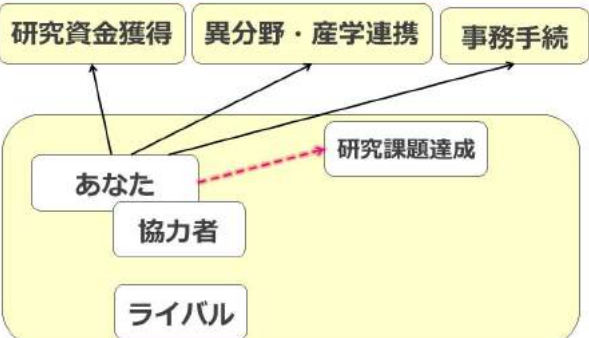
17

## 活動を経て、考えたこと

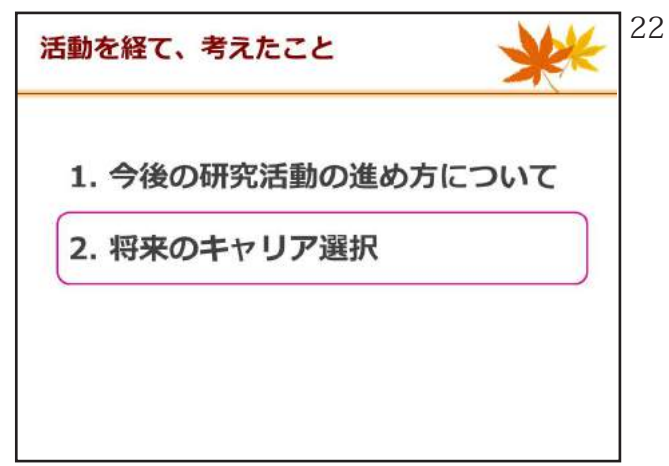
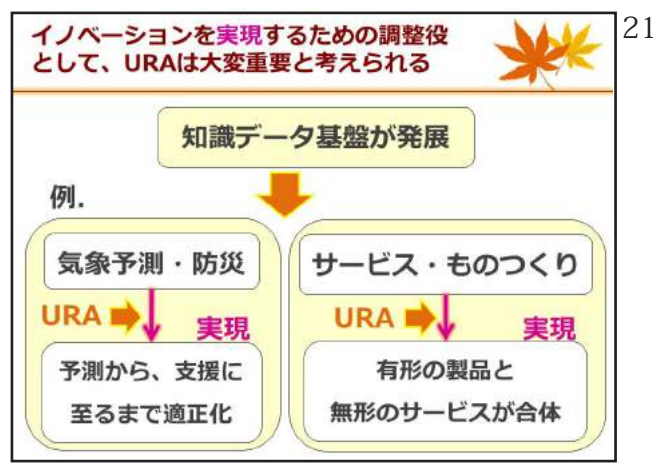
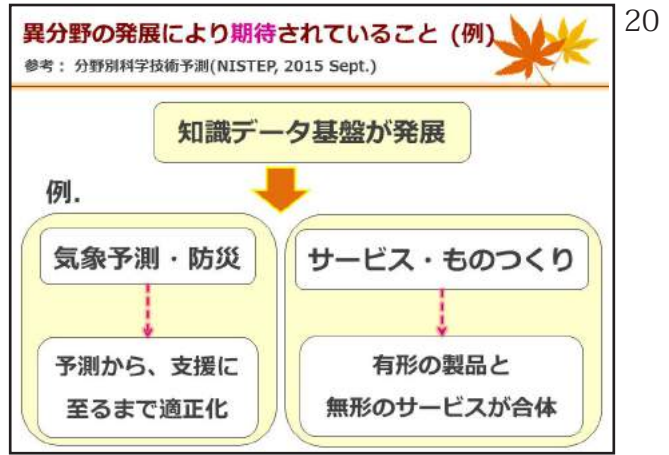
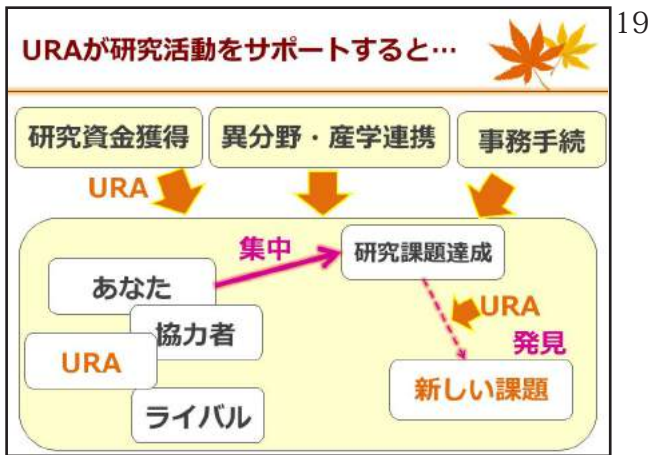
1. 今後の研究活動の進め方について
2. 将来のキャリア選択

18

## URAがない場合の研究活動







URAの業務に求められることは



25

## 最短かつ最適な戦略の立案

- プロジェクトのマネジメント

## 行動力

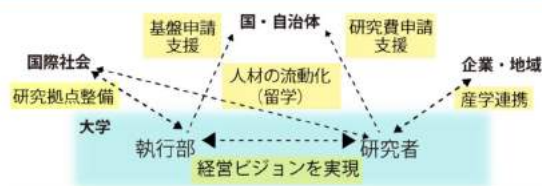
- 周囲にはたらきかけて協力を得る

研究者に求められる能力と質的には同じ

URAは、将来のキャリアのひとつ



26

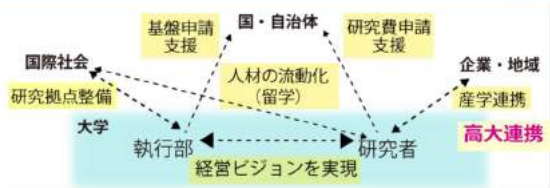


異なる立場の人の協働を助け、  
研究活動をマネジメント・支援するURAは、  
学術研究の推進に貢献できるキャリアのひとつ

将来の自身のキャリアとしての、URA



27



## 高大連携

- 研究者を目指したい生徒を支援する
- 複合的な問題に対処できる人材を育てる

謝辞(敬称略)



28

金沢大学 先端科学イノベーション推進機構  
稲垣美幸  
鳥谷真佐子  
佐々木隆太  
鈴木友

信州大学 産学官社会連携推進機構  
リサーチアドミニストレーションセンター  
杉原伸宏

大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室  
宮田知幸  
岩崎琢哉

本事業は総合研究大学院大学学融合推進センターの  
助成を受けて行われました

## 研究・教育支援職に 片足突っ込んだら世界が広がった

総合研究大学院大学  
学融合推進センター  
助教 塚原直樹

1/14

研究者になりたいですか？  
なぜ？

私は、  
大学を面白くして  
日本を良くしたい！  
↓  
だから大学を変えられる  
人になろう。  
↓  
学長？  
↓  
まずは大学教員にならなきゃ



面白いことが好き  
2/14

というわけで仕方なく研究者の道に・・・

でもやっているうちに研究にもはまる。  
研究面白い！辛いこともあるけど

学部4年間 宇都宮大学(途中1年休学し学費を稼ぐ)  
↓  
修士2年間 宇都宮大学  
↓  
博士3年間 東京農工大(宇都宮大学)  
↓  
ポスドク5年間 宇都宮大学  
↓  
助教 総研大学融合推進センター



研究テーマはカラス  
3/14

研究だけではいけない！  
視野を広げようと学生時代に課外活動を。



NPO法人設立



個人事業ホームページ制作代行  
4/14

## 私の現職の公募要領

業務内容：

- (1) センターのウェブサイトコンテンツの企画、運用、および拡充。
- (2) 情報基盤センター(仮称)との連携のもとに行うICT教材の作成・運用にかかる初期的支援。
- (3) 学融合推進のための新事業の企画と推進。
- (4) その他本センターの事業への協力。

専門分野： 特に限定しません。

応募資格：

- (1) 博士の学位を有すること。
- (2) 視野の広い研究者の育成、新しい学術分野の開拓に熱意を有すること。
- (3) ウェブページ、SNS、ICTなどの開設、運営の経験があること。

5/14

学融合推進センターは  
私にとっては天国のような職場である



調整業務、事務仕事は多いけど、  
自分で企画を出せるし、余った時間で研究できるし、  
好きなことがやりたい放題。  
6/14



## 学融合推進センターの業務

総研大内の分野横断的な様々な活動の企画、支援

- ・教育事業  
学融合レクチャー、学生企画事業、(学生セミナー)
- ・研究事業  
研究公募事業、総研大研究プロジェクト企画会議
- ・基盤整備事業  
遠隔教育支援、学内向けの広報

7/14

7

- ・ウェブサイト改修
- ・各種企画の動画制作
- ・研究者交流掲示板

顔の見える学位記授与式

8/14

8

## 様々な調整業務(一般の研究者にとっては雑務?)

- ・教員間を仲介
- ・セミナー等のスピーカーの交渉
- ・専攻の先生方、学生にイベント参加の声かけ
- ・事務方へ諸々お願い
- ・学生のサポート

業務を遂行するには・・・  
謝る、そして酒を飲む



9/14

9

研究もできます。

「カラスは食資源として利用できるか？」  
「カラスを騙すドローンを作る」



10/14

10

## 「カラスは食資源として利用できるか？」

科研に出したら不採用。  
というか酷評。  
出す分野が悪かったのか、  
ふざけていると思われたのか。

文化人類学者との出会い。  
新規食資源が  
どう受け入れられるか、  
イメージの悪いカラスが  
どう受け入れられるか、  
人文社会系からの視点。  
総研大学融合共同研究に採択。



11

## 「カラスを騙すドローンを作る」

総研大の修士生を訪ね、また、海外で活躍する日本人研究者の  
調査を兼ね、シンガポールを訪問。  
そこで、ドローンをテーマにした研究者と出会い、意気投合。

スピーカーを搭載した剥製のドローンを飛ばし、  
カラスの音声と動きから、カラスの行動誘発ができないか挑戦中。



12



学融合推進センターの職は、  
人脈も爆発的に広がり、  
研究の視野も大きく広がる。  
大学運営に関わる仕事も多数あり、  
やりがいがある。

おそらくURAの仕事も同じ？

いろいろ面倒なこともあるけど、  
それもまたスキルアップ！  
研究以外の道でも生きられる？



13/14

13

総研大3年目の今、思うこと

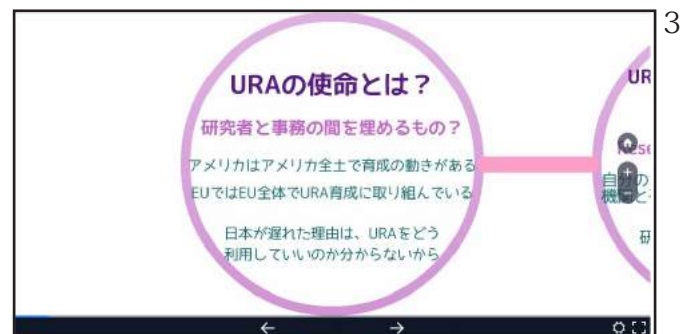
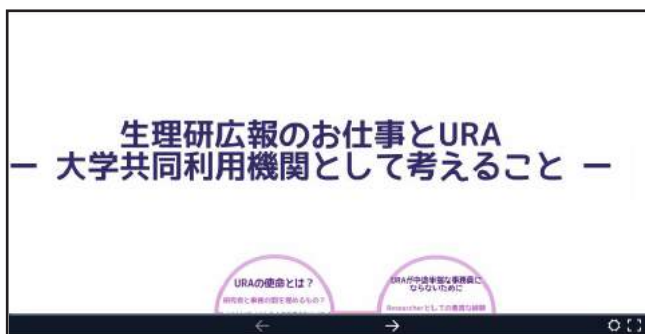
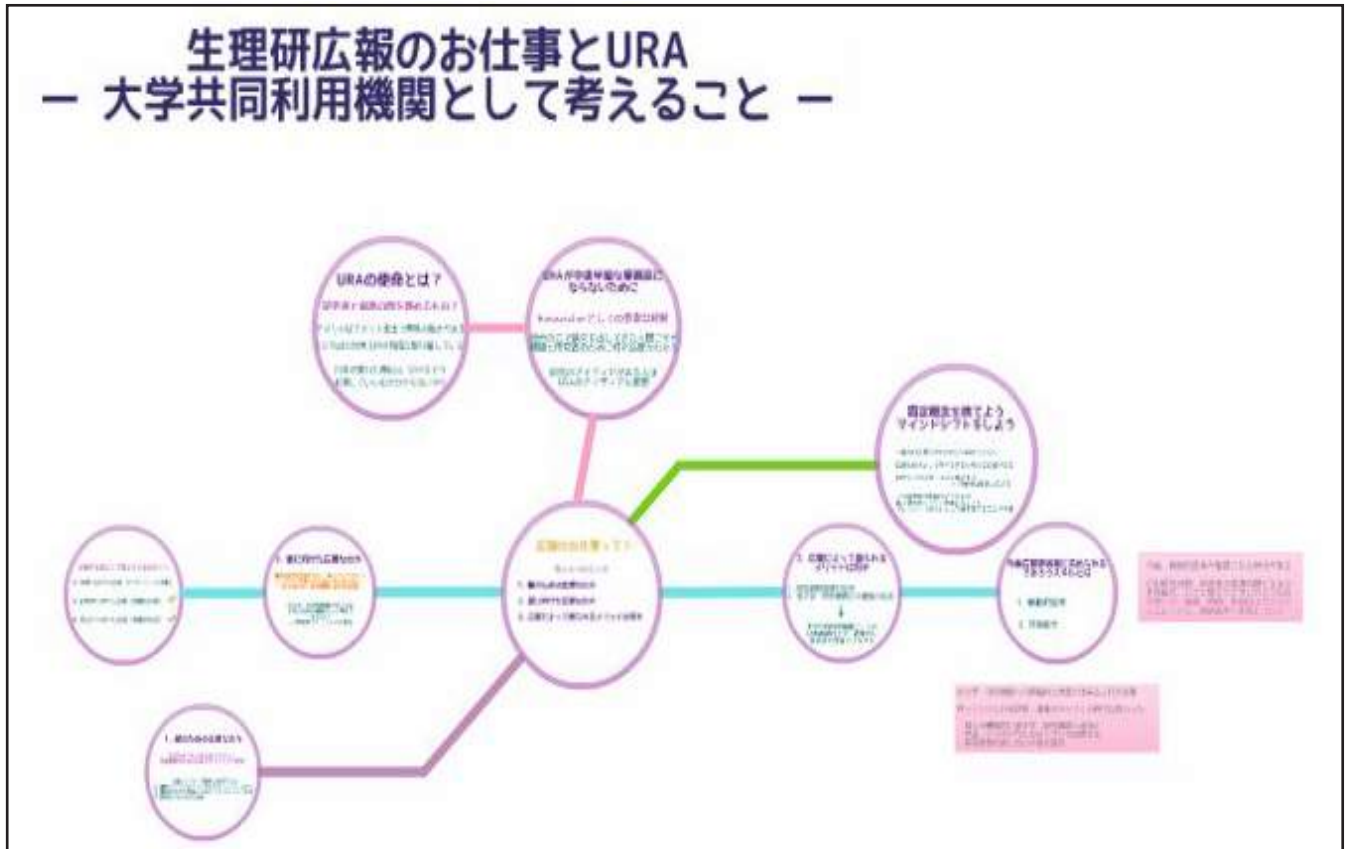
学長になっても大学を変えられない？ことがわかった。

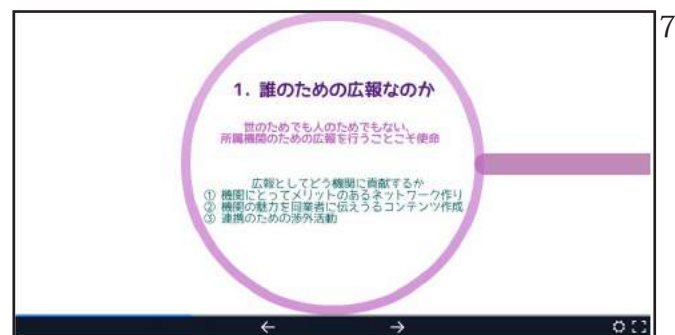
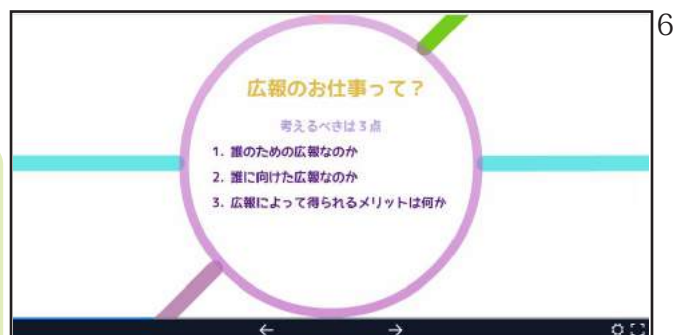
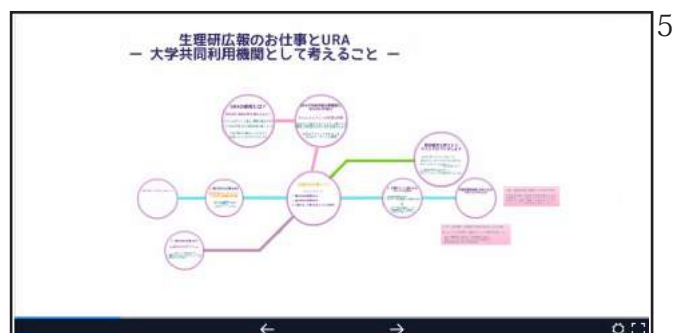
だけど今のポジションは  
世界のトップランナーの研究者に関われる  
＝世界を変えることに間接的に関われる  
＝世の中を面白く

研究は楽しい&支援職も楽しい。  
両方できる今の環境をもう少し続けたいかなあ・・・

14/14

14





10

広報する先として考えられるのは3つ

- ① 市民への広報（アウトリーチ活動）
- ② 研究者への広報（戦略的広報）
- ③ 官公庁への広報（戦略的広報）

11

## 2. 誰に向けた広報なのか

機関の存在を知らない・知っていてもどう  
コンタクトを取ったら良いかわからない、  
全ての大学・研究機関への広報

他大学・他研究機関は思いの外  
大学共同利用機関法人の存在を

12

他大学・他研究機関は思いの外  
大学共同利用機関法人の存在を  
知らない  
→ 研究者コミュニティの拡充

13

## 2. 誰に向けた広報なのか

機関の存在を知らない・知っていてもどう  
コンタクトを取ったら良いかわからない、  
全ての大学・研究機関への広報

他大学・他研究機関は思いの外  
大学共同利用機関法人の存在を  
知らない  
→ 研究者コミュニティの拡充

14

## 3. 広報によって得られる メリットは何か

- 1. 研究者間連携の拡充
- 2. 他大学・研究機関との連携の拡充

↓

大学共同利用機関としての  
利用価値向上、結果的に  
研究所の評価につながる

15

## 今後広報担当者に求められる であろうスキルとは

- 1. 戦略的思考
- 2. 営業能力

今後、戦略  
どの研究分  
を見極め、  
が咲くか、  
ミュレート



# 1. 戦略的思考

16

今後、戦略的思考が重要になる時代が来る

どの研究分野、研究者が連携の駒となるかを見極め、どこと繋ぐことでどのような花が咲くか、短期・中期・長期的スパンでシミュレートし、関係各所へ提言していく

17

# 2. 営業能力

18

他大学・研究機関への積極的な営業が出来る人材が必要

待っていても共同研究・連携がやってくる時代は終わった

- ・自らが積極的に他大学・研究機関へ出向く
- ・学会・シンポジウムなどへブース設営する
- ・研究者間の話し合いの場を設定

19

## 固定概念を捨てよう マインドシフトをしよう

一般向け広報だけやればよい時代ではない

広報もURAとして何が出来るか考える必要がある

自分なりの広報・URAを確立する

→ 可能性は無限に広がる

この業界は将棋盤のようなもの  
駒（研究者）として参加しなくても  
プレイヤー（URA）として盤を制することが可能

20

pp.59-61

著作権者の都合により非公開


1

## 平成27年度 学生企画事業 報告

### 総研大URA研究会

課題名


研究活動の「これから」を考える  
- 全国のURA重点大学における  
研究支援システムの現状調査 -



2

## 活動目標

URAによる研究支援の現状を調べ、  
博士学生の今後の研究活動の進め方や、将来のキャリア選択の参考にする

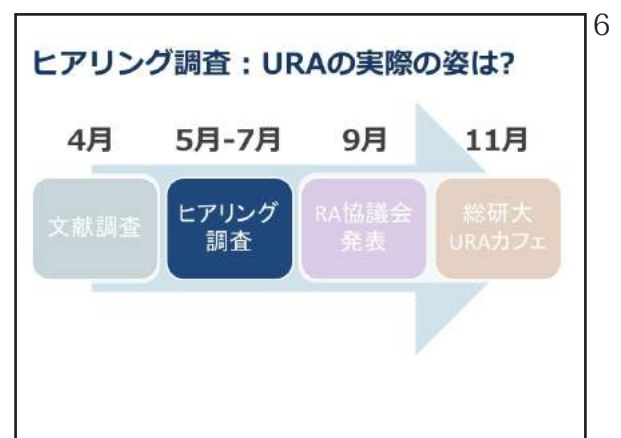
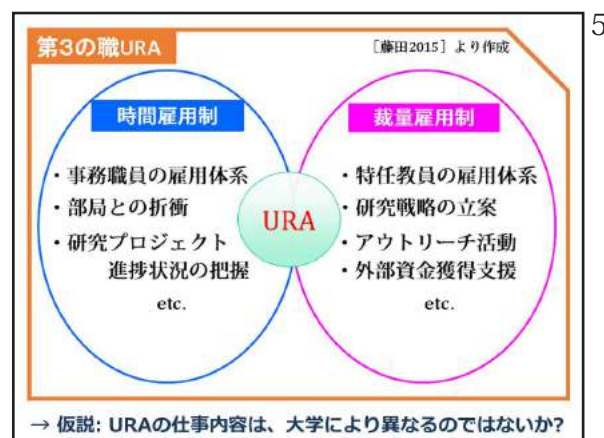
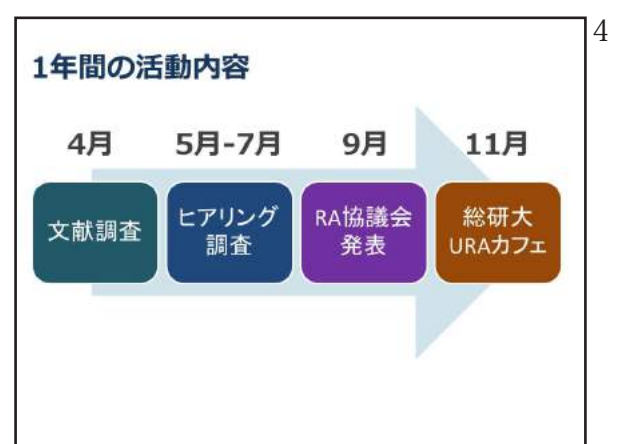


研究者 URA

・研究活動の進め方  
・キャリア選択

URAによる、研究・教育  
活動の支援の現状を調べる。

↑ 学内外の大学院生に  
共有するイベント



7

## 大学により、URAのありかたは多様だった

| 金沢大   | 信州大   | 大阪大   |
|---|---|---|
|  |  |  |
| 教育・研究・国際<br>3領域の力を<br>バランスよく向上  | 10年先を見据え<br>“選択と集中”   | 国際拠点形成を<br>目指す中央集権型<br>システム   |

8


## ヒアリングを経て、大学院生が考えたこと(抜粋)

大学経営に貢献できる人材が必要

研究と社会との繋がりをつくる仕事も

大学の特色に合わせて支援内容を考案

公共的に利用可能な“リソース”を  
大学という場につくる



## RA協議会：URAへの報告・意見交換



## 大学院生の目を通して見たURA (抜粋)

引用：第1回RA協議会ポスター, 2015 Sept.

### URAとは…

異なる立場の者同士の  
協働を支援するマネジメント職

URAと研究者、求められる能力に  
共通する部分が多くある

- 最短かつ最適な戦略の立案
- 行動力



## 他大学のURAからの反響

- ・ 質問: なぜこうした企画を学生が行っているのか  
→企画の背景、意図
- ・ RA協議会の理事の方々が見学(京大、茨城大、福井大)
- ・ 人文学系出身者と自然科学系出身者、それぞれの得意不得意  
→人材としての活かし方にどのような違い  
(新潟工科大)
- ・ いつでもお越しください(OIST, 長崎大)

## 総研大URAカフェ: 学内外との共有・議論



## プログラム (抜粋)

### 総研大からみるURA

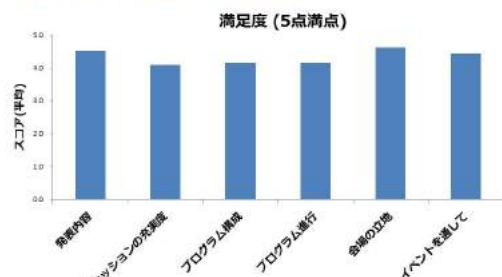
1. いま、URAを知ること (総研大生)
2. URAの存在基盤をさぐる (総研大生)  
-大学における持続可能な研究環境の構築-
3. 研究支援のありかたは、大学の特色により多様 (総研大生)
4. 研究・教育支援職に片足突っ込んだら世界が広がった (学融合 塚原先生)
5. 生理研の広報のお仕事とURA (生理研 坂本先生)  
-大学共同利用機関として考えること-

### URAからみる、つながる、ひろがる

6. リサーチ・アドミニストレーター(URA)職について (金沢大 鈴木様)

## 参加者アンケート結果

回答者 19名



- ・ 総研大内外からも多数参加。分野も幅広く集まった。
- ・ 坂本先生の話(戦略的広報)が、“興味深い内容”の回答トップ。

## URA研究会の活動を経て、大学院生が考えたこと(抜粋)

### Output

総研大のミッション  
研究者養成

↑  
分野の枠を超えて支援  
することができる課題

- ・ 研究活動の進め方
- ・ キャリア選択について

### 経営者の視点・思考が参考になる!

効率的に研究を進めるには?  
文献調査 (≒ マーケティング、シーズ発見)  
共同研究の体制を構築・維持する  
(≒ チームビルディング、各種調整)

どのようなキャリアが自身に適しているか?  
強みを生かすには大学 or 研究所? 海外?  
(≒ ブランディング)

## 謝辞(敬称略)

金沢大学 先端科学イノベーション推進機構  
堀田美幸  
鳥谷真佐子  
佐々木隆太  
鈴木友

信州大学 産学官社会連携推進機構  
リサーチアドミニストレーションセンター  
杉原伸宏

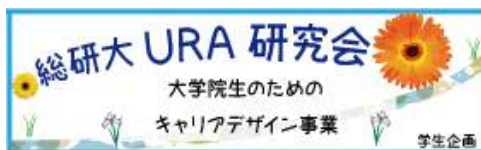
大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室  
宮田知幸  
岩崎尊哉

総合研究大学院大学  
塚原直樹(顧問教員)  
串城義則(アドバイザー)  
松本悠典  
丸尾(西村)文乃  
坂東隆宏

佐々木飛鳥  
新宅直人

本事業は総合研究大学院大学  
学際連携センターの  
助成を受けて行われました。





<http://cpis.soken.ac.jp/ura/index.html>



## 運営 写真



▲第1回ミーティングの様子



▲金沢大学訪問



▲信州大学訪問



▲大阪大学訪問



▲第3回ミーティングの様子



▲第1回RA協議会





▲ 総研大 URA カフェ 総研大 URA 研究会スタッフ (学生) による発表 (左 から東城、松本、菊地原)



▲ 総研大 URA カフェ 学融合推進センター教員による発表 (塚原先生)



▲ 総研大 URA カフェ 基盤機関の URA による発表 (坂本先生)



▲ 総研大 URA カフェ 金沢大学 URA による発表 (鈴木様)



▲ 総研大 URA カフェ (ディスカッション)

## 総研大 URA 研究会 スタッフ紹介

| 氏名         | 所属 (2016 年 3 月現在) | 分掌内容    |
|------------|-------------------|---------|
| (事業代表者)    |                   |         |
| 菊地原沙織      | 生命科学研究科生理科学専攻     | 統括      |
| (事業分担者)    |                   |         |
| 松本悠貴       | 生命科学研究科遺伝学専攻      | 運営・調査   |
| 西村 (丸尾) 文乃 | 複合科学研究科極域科学専攻     | 運営・渉外   |
| 新宅直人       | 物理科学研究科機能分子科学専攻   | 運営補助    |
| 佐々木飛鳥      | 生命科学研究科遺伝学専攻      | 運営補助    |
| 坂東隆宏       | 物理科学研究科核融合科学専攻    | 調査      |
| 東城義則       | 文化科学研究科地域文化学専攻    | 統括補助・調査 |
| (顧問)       |                   |         |
| 塚原直樹       | 学融合推進センター 助教      | 監督      |



平成 28 年 3 月 31 日発行

編集 総研大 URA 研究会

HP <http://cpis.soken.ac.jp/ura/index.html>

発行元 総合研究大学院大学 学融合推進センター  
〒240-0115

神奈川県三浦郡葉山町上山口 1 5 6 0－3 5

印刷所 印刷の通販®グラフィック